明治四十一年一月二十日第三種郵便物認可

January 20th 1908.

Report of the Sericultural Association of Japan.

No. 188.

大日本蠶絲會報

第百八拾八號目要

▲口繪▼

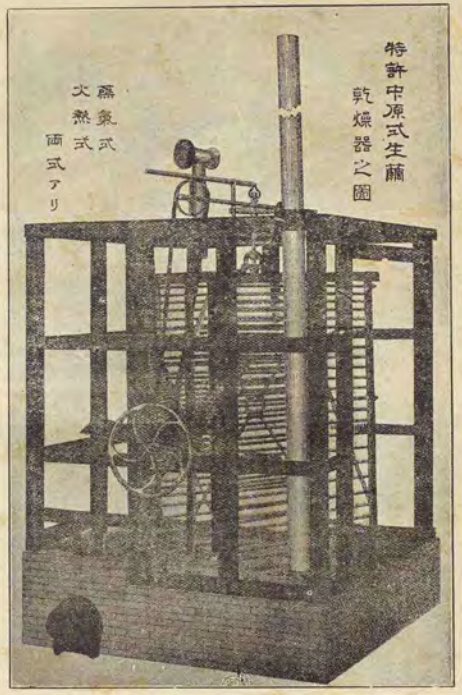
●明治四十一年を迎ふ　會頭男爵　松平正直
●蠶の消化と溫度との關係　農學博士　澤村眞
●青森に於ける桑樹病害に就て　蠶業講習所講師　野村彥太郎
●桑樹害蟲の二新種　農學士　明石弘
●桑樹の新三大病害　農學士　理學士　堀正太郎
●我生絲は何故に需要者に非難せらるゝか　東京蠶業講習所技手　松下憲三朗
●蠶絲業發達の基礎を論ず　小松嘉藏
●横濱に於ける生絲檢査所の由來及現況（佛文）　農學士　紫藤章
●上州藤岡に於ける高山社（佛文）　生絲檢査所技師　今西直次郎
●生きたる萬國大博覽會　日本大博覽會長子爵　金子堅太郎
●日本大博覽會の出品に就て　日本大博覽會事務總長　和田彥次郎
●蠶絲業家と衛生　醫學士　石原喜久太郎
●秋蠶の話　蠶業講習所技師　土屋泰

▲讀者文藝▼

▲日本蠶絲界の典型　波多野鴻吉君▼

TOKYO.
The Association:
No. 2 Mitoshiro-cho, Sanchome, Kanda, Japan.

謹賀新年



説明書圖面は御請求に依り送呈す

特許中原式生繭乾燥器製作販賣所

東京市本所區德右衛門町三十四番地

電話浅花貳貳六番　電略(ナカ)

新年之辭

斗柄一轉無終無始の「時」茲に一歳を劃して衆庶萬象に對す霄漢に漲る綺雲乾坤に瀰る彩霞嗚呼之れ何等嘉世の端象ぞや本會亦茲に十有七の齡を重ねて三萬有餘の會員諸君と共に此の無疆の佳春を迎ふ福祉も亦極れる哉今算を新にして惟ふに事に起伏あり時に波瀾あるは正に之れ人世の常のみ事極れば平に時定れば自ら穩なり客歳順を以て起りし我が蠶絲業は不幸にして亂を以て終り所謂龍頭蛇尾の常套語を賞しゝと雖も何ぞ深く意に介するに足らん財界亂れ經濟潰ゆるも事極り時定らば自ら全きを致すべし當局の上下協力一致之を前徹に鑑み自重よく計を爲して處するあらば異路同歸何の難きことか之れあらむ冀くは全國の會員諸君客歳の餘波に動ずることなく鋭意皇國の隆昌に力められんことを觴間の算事卜すること此の如しと爾云

戊申春王正月

大日本蠶絲會

日本大博覽會總裁伏見宮殿下
L. A. I. le Prince Fushimi, Président de la Grande Exposition du Japon.

日本大博覽會長爵子爵金子堅太郎君
Monsieur le Vicomte K. Kaneko, Directeur Général de la Grande Exposition du Japon.

日本大博覽會事務總長和田彦次郎君
Monsieur H. Wada, Administrateur Général de la Grande Exposition du Japon.

第百八十八號 大日本蠶絲會報

目次

論叢……一—一三
●明治四十一年を迎ふ　會頭男爵　松平正直
●蠶の消化と溫度との關係　農學博士　澤村眞
●青森に於ける桑樹病害に就て　蠶業講習所講師　野村彦太郎
●桑樹害蟲の二新種　農學士　明石弘
●桑樹の新三大病害　農學士　堀正太郎

拾芳……一四—一九
●我生絲は何故に需要者に非難せらるゝか　東京蠶業講習所技手　松下忠三朗
●蠶絲業發達の基礎を論ず　東京蠶業講習所員　小松嘉藏
●横濱に於ける生絲檢査所の由來及現況（續文）　農學士　帶藤章
●上州藤岡に於ける高山社（續文）　生絲檢査所技師　今西直次郎

叩門……一九—二四
●生きたる萬國大博覽會　日本大博覽會長子爵　金子堅太郎
●日本大博覽會の出品に就て　日本大博覽會事務總長　和田彦次郎

家庭……二四—二六
●蠶絲業家と衛生　醫學士　石原喜久太郎

講英……二七—二九
●秋蠶の話　蠶業講習所技師　土屋泰

心影……二九—三二
日本蠶絲界の恩人　渡多野鶴吉君

問答……三二—三六
●桑樹凍傷に就ての質問竝答●蠶室蠶具の設備其他に就ての質問竝答●春蠶種の風穴貯藏に就ての質問竝答●軟化病に就ての質問竝答●微粒子に就ての質問竝答

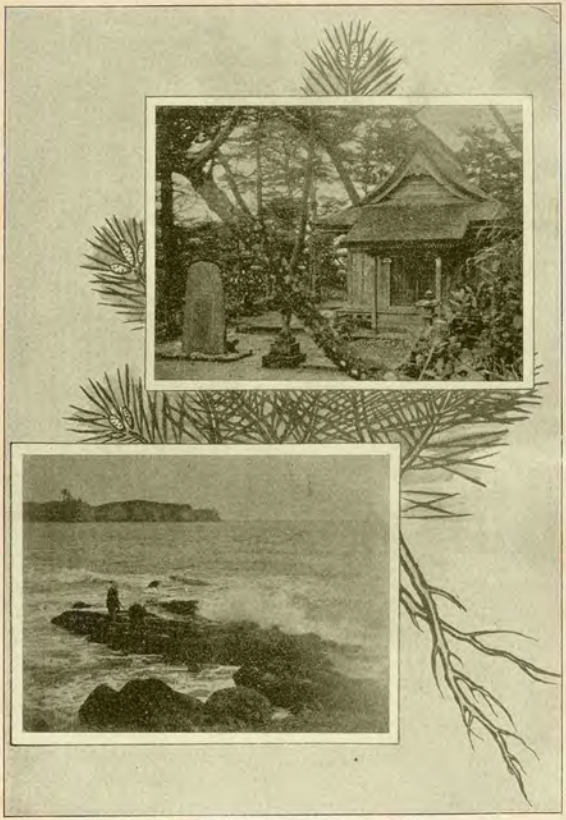
資料……三七—三九
●千九百六年度世界重要產絲國產絲額統計

絲況……三九—四四
●横濱市場●里昂市場●紐育市場

時報……四五—五四
●實務練習＝評議員會＝支會規則の改正＝賞牌大會決議事項の建議＝功績調査委員の選擧＝支會職員の囑託＝地方委員並職員の囑託＝吉池埠事の由來＝熱湯子種種試驗の委託●傳國蠶絲奮發勵金＝世界生絲會報＝小島綿の祝賀會●讀者文壇＝一日與入十四貫目と二十四貫目天と二十六貫●蠶海相圖●新刊紹介●質問錄

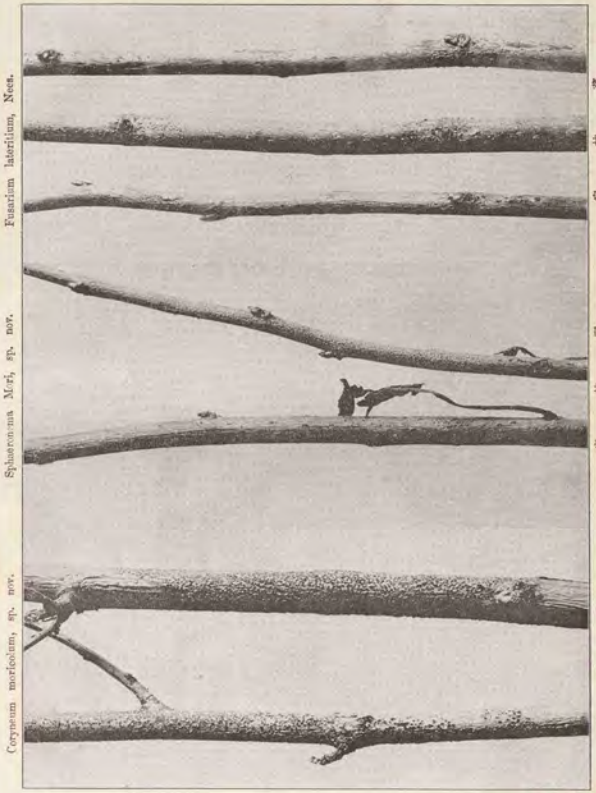
常陸國鹿島郡神社

Le temple "Kogai jinjya" à la préfecture d'Hitachi.



常陸國鹿島郡濱の景

Vue de Kogaihama à la préfecture d'Hitachi.



桑の三大病害圖

鹿島郡

Monsieur T. Hatsuta, Président de la "Gunzo seishikwaishia."

群馬縣野多瀧長社會株式會社

人夫同
Sa femme

熊内久慈作の社會株式會社群馬縣下前橋市

Vue générale de la "Gunzo seishikwaishia."

蠶養濱降臨神祿記略

語で國史を證するに日本紀神代卷一書に桐葉突智命埴山姫命を娶りて稚産靈命を生ませる其御子倉稻魂命の御體より蠶生れ出ゐる故よしと頃て父御神命の神祿のうちに蠶生出巢さしめん神慮ましまして御子神にいたり神德なからぼしますにそ在り行る翔貨社は乃ち宇氣母智命の跡なりたれ玉ひし清地なり社記を考るに人皇第七代孝靈天皇の御宇五年辛巳二月初午の日常陸國多賀郡登浦の水門蠶養濱の曉望もあかぬ青海原の八十島兎嗅の間の八百道の八隈道の地皮頭浪に漂へて桑の御船に大神の光り輝く珠の櫂に打乘り玉ひて珠拾ふ蠶養の磯の上に立給ひし時かり詔給へく吾は宇氣母智神なり此の潮の清浪の清蹤にいつまつらは天下蒼生がこかひの道の幸福萬千秋の我秋にとらしめんと神諭のありけれ畏き詔人等寄集ひつゝ御合抱奉りしに幾程もなく空しくなり給ひぬ其神體化して蠶となれり此故に蠶初の居起を御手の居起二度の居起を豐の居起三度めの居起四度めの居起と云るは始め居起の居起と云るは始め居起が四度の組に遇給ひし事を敍りてかくは名付しぞ命が神諭のまに〳〵蠶養濱神路社の上手山の麓に宮柱太敷立て奉齋神祀し給ひし寶呉ありしより後して日本最初蠶養の御祖の神と崇め奉る其清を登浦の水門と云り尊神現れ玉ふ處を蠶養濱といふ元來國井村と云り里中に清泉清出する井あり故に村名とす里民本居の地ゟ船れて流の國消にうつる船り上古敬行天皇の皇子日本武尊東征して上越より陸奥に入らせ給ふ御時御船を當浦の水門につなぎ蠶養濱の社に詣て克事なる所る三日夜既にして船を發し假寐の間に入る不覺して假寐度く平ぎ甘高見國より常陸を經て甲斐にいたり給ふこのとき今の社地に迂しとつる 始尊神影向の地は其の方にあたれり二千九百六十尺縦二千丈正倉庫平の清地より潮の滿干に災を過さて海中となり潮の八百會に沒ぎ是ゟ神明現れ給ふの高御産なり其頃間より神庫合慈の賦石蠶生且生る是邪を除き穢ゟ遠くると云傳へり毎年二月初午除厄四月十四日霜月十七日大祭行ふ諸國寄項より來り詣て入蠶養の狂歌を祈るもの間斷なし其外神祿の遺跡多一經樣遠、詰喰慈魂島蝶島船橋等の舊名あれと上世無古にして傳少し悉く辨別する事ゟ得て去は當國の里民蠶飼に誤りて忌服の汚穢に家ゟと嫌も蠶全して除りとならすと是神慮の内にして常に神護し給ふと云り古傳しと雖大悠遠の昔に細辨じ難し只社傳為記により其大略ゟ記し神祿有增ゟ世に廣むると云爾八附記本文に大澤福二郎氏が同社ゟ拝端枝氏所藏の祿記ゟ特に請ふて書寫と日袖に渡りたる寫眞と共に本會へ寄贈ぜられたるものなり祿に其厚恵ゟ謝す〉

大日本蠶絲會報　第百八拾八號

論叢

明治四十一年を迎ふ

會頭男爵　松平正直

斗柄一轉歲華改りて、茲に明治四十一年を迎ひ、春光八荒に漲り、靈震地を極め欣言賀詞年と共に集きを加ふ、此多幸多福の春に遇したる我五千萬の同胞其盛衰やし如何、會員三萬有餘の諸君と共に此新歲を迎へたる吾人は唯感極つて聖壽の高歲を三唱し奉らんのみ。

然り而して本會は新年初頭特筆すべき二大慶事を有せり、曰く線紋伏見宮殿下の我蠶絲業に御心を注がせ給ふことの深き昨夏御跡後備に九旬御虚未だ驗かならざるに、早く本會第一回臨外三種品評會、褒賞授與式に臨あらせられ、新しく斯業視察の勞に當らせ給ひしと之れ其一にして畏くも聖上陛下に於ては昨秋武を常毛の野に閲し給ふに當り宮内御巡幸の慮止み給はず其地に於ける各蠶業家に親しく謁を賜へ、又特に侍從を各其工場に派遣し優渥なる聖旨を垂れさせ給ひしこと之れ其二なり、共に特に蠶業の爲に大人の頭上を飾るべき無上の光榮にして又我蠶絲業の爲金枝玉葉の御身を以てして大御心んばあらず、嗚呼九五の尊の如し、寔に感激の至りに堪へざるなり、會員諸君若し此無量の聖恩を體し新春に處せば、或は以て其萬一に應ふるを得んか。

而して過去は過ぎ去り故知新、必ずしも夫子の一家言にあらざれば、爲すを得べく溫故知新、必ずしも夫子の一家言にあらざれば、茲に客年に於ける我蠶絲業の大班を略叙し以て諸君の參考に資せん、抑も一昨年に於ける米國農作物の豊饒と歐洲經濟界の好況とは我生絲貿易をして空前の旺盛を極めしめ、養蠶家の意氣頓に昂り昨春に於ける蠶種の需要は其前年に比して二割以上の增加を示し、爲に蠶種の缺乏を告げしと雖も、移して以て未來の鑑とにして桑葉の發育頗る良好なりしと、一昨年來桑園の增植せられたるもの多かりしとに依り一時吾人をして憂念せしめし桑不足も全く跡形なく一片の杞憂となり、天候順調を得て蠶兒の發育良好に成績の優良なること近年稀有の現象に屬し、而かも横濱市場に於ける絲價は一歩一歩に騰貴して、上半期に於ける斯界は其に我當業者をして長へに太平の春を謳はしめん

とするの概あり、夫れ此の如く天運順にして吾人に厚からば常に財界の一方に救援の旗幟を翻へし得たるならんも、人間萬事塞翁が馬か、秋蠶期の天候兎角順を得ずして其成蹟概ね良好ならず、加ふるに未曾有の水害は本邦有數の蠶業地をして桑田變じて海の慘状を演ぜしめたり、而して一面米國經濟界の擾亂は我生絲貿易に多大の反響を與へ、一時一千三四百圓臺の高價を示したる絲價は漸次下向きつゝ、遂に九百圓臺に低落し、尚取引皆無の狀態にて年末に於ける横濱埠頭の生絲在荷は四萬五千梱餘を算し、稀有の大停滯を見るに至れり、誰か夫れ無限の感なからんや、如此にして其輸出數量は之れを三十九年度に比し一百十四萬〇百二十三斤を減じたれども平均單價の昂騰せし結果は其總輸出額一億一千六百八十八萬八千六百三十七圓の巨額に達し開港以來未曾有の大盛況と呼ばれたる、前年の輸出額に比すれば其多きこと六百四十四萬五千八百二十七圓にして、羽二重の輸出額二千九百十四萬九千四百七十八圓、絹製手巾の輸出額五百二十九萬五千七百八十圓、屑絲の輸出額六百二十四萬四千九百九十六圓なるを以て生絲及絹織物の總輸出額は實に一億五千百三十三萬三千八百八十五萬圓てふ多額の數字となり、本邦輸出總額の約三割五分に相當す、國家經濟に貢獻するの功績も亦大ならずや、而して玆に吾人の製絲家に望まんと欲するものは殘絲の處分問題に在り、頃者海外電報の所報に依れば昨今歐米の金融は著しく緩和したりと稱す、然れども至大の創傷を醫するには假すに長日月を以てせざるべからず而かも吾人の觀察に依れば米國經濟界の如き今後數ヶ月を經過するも健全なる狀態に復するや否やは頗る疑問にして隨て絲價が往時の如き高直に恢復するや否やは更に一層の疑問とする處なり、假りに多少の恢復を實現する場合ありとするも、金利及倉敷料等を計算すれば到底損益相償ふものにあらざれば、徒に高直を夢想しつゝ之を賣り遁るが如きは、策の得たるものにあらざるべし、殊に國家經濟上より之を觀れば寧ろ成行賣に任して速に之れを處分するに如かざるなり、即ち假りに殘絲の總額を四萬梱とし一梱の絲價九百圓とするも三千六百萬圓の資金を回收し得るにあらずや、勿論高價の原料を買入れたる製絲家に取りては如何にも忍ぶ能はざる處ならんも徒に大勢に抗して悔を貽さんよりは可成的速に賣應じて徐ろに新絲製出の計畫を立つべきなり、而して此新絲製造の計畫に就ては吾人敢て一言なきを得ず、元來物の需要は物價の高低に依りて增加するものにして物價の高低は生產費の多少に依りて支配せらる、故に若し一物にして生產費高ければ物價高し、物價にして高ければ爲に需要の減退を來し需要減退すれば假令高き生產費を要したる物と雖も價格低落して生產費以下に降ると珍らしとせず、然れば製絲家にして高き生產費を投ずるも其生產物は必ず之に比例して賣却し得るものと信ずるは誤謬の大なるものにして、現に客秋來の生絲貿易の如きは明に之を證し得て餘りあるとなり、然れば製絲家が原繭購買の無謀を敢てし高き生產費を投ずるが如きは嚴に戒むべき事に屬すると共に、吾人又養蠶家に一の希望なき能はず、曰く他なし、徒に繭價の高きを希ふが如きは決して斯業の安固を期する所以に非ざれば可成的其成繭を低廉に供給するの

覺悟を要すると即ち之れなり。

養蠶は固と農家の副業として經營すべきものなるが故に勞力の供給に於ては他の競爭を受くること尠く或は全く之れを受けずして經營し得るものなるを以て經營の方法如何に依りては其勞銀は充分に低廉ならしむることを得べく、隨て其生產物は或程度迄低廉と爲すことを得べし勿論吾人は生產物の低廉を望むも、敢て經濟上價値なき若くば價値低き物を生產せよと慫慂するものにあらず、所謂低廉なる生產物とは尠き生產費を以て價値高き優良なる成繭を產出し之れを低廉に供給すべしと云ふに外ならざるなり、養蠶家或は說を爲して言はん、蠶兒唯一の飼料たる桑葉を購入する場合多きが故に此點に於て製絲家と同じく原料に制限を受けざるべからずと、然れども之れ養蠶を他の製造工業と同一樣に行はんとするものにして、根本的に其經營組織を過れるものと云はざるべからず、何となれば養蠶が農家の副業たる以上は、自己の邸内若くば田畠の餘地に栽植したる桑樹を以て蠶兒を飼育し、勞力は勿論桑葉の供給を敢て他に仰がざるを以て本旨となすべきものなればなり、彼の米國の農家は其副業として菓物の罐詰を製造し、之を市場に販賣すれども其原料は必ず自園に生產せる菓物を以てし、敢て他より購入せざるを例と爲し、若し自園に生產せる菓物なく他より購入するときは、損失有つて利益なしと云ふ、夫れ然り然るに農家の副業として最も着實に經營せらるべき本邦の養蠶が其勞力と桑葉とを他に仰ぐを敢て意に介せざる結果危險の分子を增加し一種の投機的事業の如く世人をして往々誤解せしむる者あるは返す〲も遺憾の沙汰なりとす、されば養蠶家宜しく農家の副業たることを忘れず必ず自己栽培

（野澤蠶兵寄贈）

客年十一月山口縣平生町に開かれたる山口支會品評會場の全景

の桑葉を以て蠶兒を飼育し敢て一葉だも他より購入する事勿れ果して然らんには桑の市場なく、從て桑價の變動に依りて不測の損失を被ることなからん、之れ實に養蠶を恒産として安全に經營し得るの道なるのみならず、其成繭の程度迄低廉に供給することを得べし、成繭の價格にして低廉なれば製絲家は勿論生産費を以て生絲を製造し得るが故に假令假令九百圓臺より下ることあるも尚大なる損失なからん當業者或は自己の生産品を低廉に賣却するを以て如何にも經濟上の不利を招きたるが如く感ずるならんも最後の勝利は遂に依り期せざるべからず、即ち低廉に賣却すれば需要の增加と共に輸出愈々增加し外伊佛清の生絲を市場より駆逐すること容易なるべく内地にのみ依りて養蠶製絲の發展を促すに至らん此說にして正鵠を失せずとせば、蠶家絲家共に之に鑑みて本年の計を爲せ、然らば我蠶絲業界は再び客歲の徹を踏むことなくして、洋々たる結果を齎らすべし希は會員諸君緊褌一番大に策を立て計を籌らし、奮勵以て其道に盡されんことを祈りに臨み謹んで、會員諸君の健康を祝すと爾云。

蠶の消化と溫度との關係

學士會員
農學博士　澤村眞

總て冷血動物は蠶に限らず圍周の溫度に由りて生機を盛衰するは能く知られたる事實にして、溫度高き時は蠶兒の食欲亢進し生長旺盛にして幼蟲時代の經過を比較的短時日で終るは養蠶者の常に實驗する所なり、蠶の習性此の如くなるを以て、人工を加へ溫度を高め蠶兒を飼育する法即ち溫暖育なるものの行はるゝに至る、此の如く溫度が生長若くは消化に及ぼす影響は能く知られたりと雖ども溫度が消化に及ぼす關係は未だ研究せられざるが如し、溫血動物に就ても溫度と消化との關係は詳細に之を研究せしものなし雖ども家畜に於ては寒暖は消化に影響なしと認めらる蠶に於ける溫度と消化との關係は學術上興味ある問題なりと考へしを以て、明治三十九年之れが研究に着手せり。

此試驗を遂ぶるに當りて深く感謝せざる可からざるは農商務省農事試驗場技手御手洗吉君（當時東京帝國大學農科大學助手）及東京帝國大學農科大學助手大島武三郎君の多大なる助力とす、即ち御手洗君は飼育に關する一切の勞を採り大島君は化學分析を擔當せられたり。

試驗に供せし蠶は小石丸にして五齡に於て一回給桑せしが冷なる室に置けり、室の溫度は溫育の方撰氏二十三度乃至二十四度にして冷育の方十八度乃至十九度にして濕度は兩者共に大差なかりき、給桑は共に午前五時九時正午十二時午後三時六時十時の六回にして、六月十二日より同十七日迄飼育の給桑殘桑及糞の量左の如し、但し數は瓦とす。

給桑　新鮮量　三八六〇〇〇
　　風乾量　八八七〇七〇

溫育　冷育
二七〇〇〇〇〇
六二〇、四八七

殘桑　新鮮量　三六四、一〇〇　六二五、〇〇〇
　　風乾量　一一五六、八八〇　二四一、六三一
糞　新鮮量　一一八四〇〇〇　五五三、〇〇〇
　　風乾量　六二五、八八八　三一七、一三九

給桑殘桑及糞は精密に分析し其成績に據りて各糞分の食下排泄及消化せられし量を計算すれば左の如し但し數は瓦とす

溫育

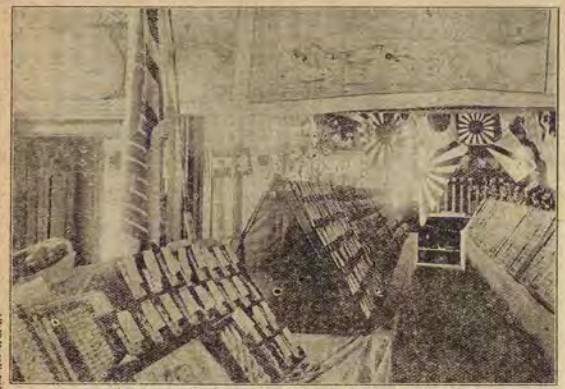
	給與	殘留	食下	排泄	消化
固形物	八六、八〇〇	一四、六五二	六六、一四八	二三、〇四四	四三、一〇四
蛋白質	一四四、八三	二六、六六九	一一七、一四四	四、一六六	一一二、九七八
粗脂肪	四七、二四一	七、三七九	三九、八六二	一、四〇五	三八、四五七
粗纖維	一二四、三六六	三一、二四七	九三、一一九	三八、八六六	五四、二五三
可溶無窒物	四六、〇四六	七、一二七	三八、八九九	四〇、二四四	一八、六四四
灰分	六六、八七七	一一、八六六	五五、〇三一	四六、〇三一	四、四〇一

冷育

	給與	殘留	食下	排泄	消化
固形物	五五、一四一	一一、八〇〇	四四、三〇一	一三、四〇四	三一、〇六六
蛋白質	一〇一、五五四	二六、六六六	七五、〇四八	四、一四一	七一、〇六七
粗脂肪	三一、四四四	三、一四四	二八、二九九	一、六四六	二七、六四六
粗纖維	八六、八六六	三、六六六	八二、〇〇〇	四六、〇〇一	四〇、八八〇
可溶無窒物	三三四、四四六	一四四、四四四	一九六、〇〇四	一四六、〇四四	一三、八六六
灰分	四六、三六六	一八、八六六	二七、一六一	一四六、一四四	一三、八六六

蠶の窒素中には果殼のものを含まるれば蠶の粗蛋白質なるものは頗る不純雜のものなり故に粗蛋白質の消化を檢するは無用の勞に近りれば之を省き純蛋白質のみを計算せり、又溫育に於いては粗纖維は食下せしものより排泄せしもの少しく多し粗纖維の窒量は頗る困難にして且不精確のものなれば此の如き試驗誤謬は止むを得ざる所なりか。

以上の數より消化率を計算すれば左の如し。



（野澤吉氏寄贈）

由口支會品評會陳列場一部の光景（其二）

	温育	冷育
固形物	一八、七八四%	一八、七八九%
蛋白質	三九、一一五	四〇、八一四
粗脂肪	三七、〇一七	四〇、〇七九
粗纖維	—	一、七二一
可溶無窒物	六、〇八九	七、六四五
灰分	八、一一七	一〇、九七五

此試驗成績に據りて觀れば食下せし固形物は温育に於て六七六・一四五瓦、冷育に於て三五二・九四一瓦にして温育の一〇〇に對し、冷育は五二、二なり、温度の高低に由りて、食欲には此の如く差異ありと雖ども消化に至りては温育冷育の間に著き差異を認めず、即ち固形物の消化は、二者殆ど全く同一にして貴重なる蛋白質の消化も亦然りとす。但粗脂肪可溶無窒物灰分の消化は冷育却て温育に少しく優れり、粗纖維は「ケルネル」博士の研究に於ては蠶全く之を消化せざりしも、冷育に於ては少しく之を消化せり、此の如く温度の低き方微小なりとも消化の割合高きは之れ冷育にては食物の消化器中に在る時の長き爲めにはあらざるか、何となれば高等動物に於ては食量を非常に増せは消化器を通過すること速急にして之が爲め消化を惡しくすることあればなり。

要するに此試驗に於けるが如き温度の差は、（攝氏十八九度と二十三四度）蠶兒の食欲には大なる影響あるも消化には其影響殆ど言ふに足らざるなり。此試驗に關する詳細なる記事は他日別に公にせんと欲す。

青森に於ける桑樹病害に就て

學藝委員　野村彦太郎

予は東京蠶業講習所の命を奉じて青森縣下に流行する桑病に關し、昨四十年九月二十八日東京發程の上其調査に從事したり今左に大要を記せんと欲す。

本病は桑樹栽培法の如何、其種類の如何に由て其被害に多少の差なきにあらずと雖も、同縣にて最も恐るゝ所のものは多くは秋田式を施したる桑株の主幹に發病するものにして其發病部は根際或は之より四五寸以上或は又一二尺以上の所にも發顯せり。而して此の如き部位に發病したるものは屢々全樹をして枯死せしむるを以て人の之れを恐るゝも故なきにあらず、然れとも予の實驗する所にては其發病部は主幹のみにあらずして枝葉に於ても亦之れを發見し得べし、此の如き場合に在ては其被害は僅に一局部に偏するを以て人の之れに注意せさるものならん哉、予は青森縣下に於て恐るゝ所の被害主幹の病徵を左に簡短に記載せん。

發病の輕少にして僅に時日を經るものに在ては被害部は多少褐色を帶び、其隆線は多少破壞し、其中央部は一體に淺く陷落すること多し、然れども其病の年月を經たるものに在ては多少長線狀に陷落して黑褐色を呈し、且つ其隆線は高起し其表面は多少鮫膚狀をなして木栓質を混在するもの多し、而して殊に病の進歩したるものは形成組織は勿論材部に至るまで腐朽せるもの往々にして是れあり。此の如きものに在ては其樹は全く枯死せざるも枯死に瀕するの狀態を呈せり。而かも此の如く衰弱を呈するも其根には全く異狀なきもの〻如し、之れに反して其病の極めて輕少なるものに在ては、往々癒合組織を再生して病の平癒したる痕跡を證し得べきものなきにあらず、前陳の病徵より察すれば伊太利にて猪瘀（Hogna）と稱する桑病に適當するもの〻如し。

予は幸に同縣農事講習所員の好意に由て同所の一室を借用したれは、予は同縣下の諸方より採集したる病桑株に就き其被害部より切片を作りて之れを鏡檢し或は其部分を白金線頭にて檢鬪して之れが分離培養を試みたり、加之予は歸京後其被害桑株を適宜に切斷して之れを科學的處置を施したる玻璃溫室に入れて其被害部の腐朽を促したり、其成績より判斷すれば、予は其病原を特種の細菌に歸せざるを得ず。

固より其病害の進歩したるものに在ては特種の細菌の他に往々黴菌類等の混在するを見るも其病の輕少なるものに在ては黴菌類を檢出すること稀なるのみならず、他種の細菌を檢出することも亦少數に限れり、予は屢々黴類を殆んど檢出すること能はずして、而も特種の細菌の繁殖するものあるを實驗せり、予は此事實を發見したるを以て茲に予は其病の輕少にして確實なる病徵を有する數多の標本に就き一々之れが分離培養を試みたり、而して其發生したる聚落より共通に發見せらる〻ものにして、而も比較的多數に發生する特種の細菌を得たり。

其特種の細菌とは他にあらず、既知の桑樹寄生菌にして、「マキチャー」氏に由て Bacillus Cubonianus と命名せられ「ボーヤ」氏「ランペル」氏に由て Bacterium mori と命名せられたるものなり、而して此寄生細菌は桑樹に寄生して之に大害をなすのみならず又此細菌は一時蠶兒の軟化病原菌と混同せられしものなり、然れども諸大家の研究に由て軟化病々原菌とは全く異なるものたることを發見せらる〻と共に注射法に由ては之れを斃死せしむるも濺食に由ては之れを斃死せしむるの困難なることを發見するに至れり。

又此細菌の桑樹被害の狀態等に就ては明治三十一年植物學雜誌第百三十七號、百三十八號に於て「ペリオン」氏の論文を譯出して予は其顚末を報告せり、降て本邦に於て此細菌の近來殊に根刈桑の枝葉を慘害することは一昨三十九年堀農事試驗場技師が大日本蠶絲會報第百六十四號、百六十五號、百六十六號に連載せられし所にして既に世人の既に知れる所ならん。

故に予は云んと欲す、前述の細菌は根刈桑のみに限らずして、又仮く秋田式を施したる高木に於ても其慘害を逞ふすることを知り得べし、然れども此細菌は強固なる幹部に如何にして侵入繁殖するに至りしやの問題に對しては予は恐くは其幹の疵傷若くは皮孔等より侵入したるものならん哉と想像せり、何となれば予が今回の調査に徵するも昆蟲の傷害したる痕跡を有するものにして、此細菌の繁殖するものあるを目擊すればなり、故に予は云はんと欲す、凍害の如きも其死傷を誘起するの一因なりしも未だ知るべからず、何となれば伊國の所謂、猪瘀病に於ても亦凍害多き所に甚しければなり。

加之此細菌の分布の廣きことは歐洲は勿論近來に至ては南北亞弗利加にも發顯せらるゝに至れり、而して近年に至ては此細菌の大廠、其花果樹を害すること甚しきと、又其他の樹木草類をも害することは近年の植物病理家の既に記述する所なり、此の如く此細菌の其害過ぎるの所以は此細菌が比較的酸性に富める培養基に繁殖する特性を有するならん、此特性は植物酸性液に抵抗して繁殖するの餘裕あればなり、其詳細に至ては不日發刊すべき蠶事報告に譲る。

子は終に臨んで數言の加ふべきことあり、前述の如く其病の進歩したるものに在ては往々(病の輕少なるものに在ては之れを發見することあり、其病類を發見したるものにして子は此世代を發見したるものなり

贈答寄會　山口支會

必ず之れに伴隨すべき子嚢世代あらんと想像したれば、之れが發見に努めたりしに、果して子嚢世代に屬するものにして Diporthe 屬の園類を檢出するに至れり、而して其種名を穿鑿するに既に「サッカード」氏に由て、Diporthe niphonii と命名したるものに合當するが如し、因上の事に依り其「ピクニデヤ」世代即ち「フォーマ」の形式を有するものは最近の分類法に據れば Phomopsis と命名するは至當なるが如し何となれば子嚢世代たる「デヤポルチー」屬に屬する「フォーマ」の形式を有するものに「フォーモプモス」の屬名を充つることは風に「サッカッド」氏の唱道する所にして其助手たる「トラベルソ」氏は千九百六年十月刊行の伊太利國花植物譜第一部園類編第三卷第一冊第二百十四頁より第二百八十五頁に亘る(Flora italica cryptogama Pars. I. Fungi Vol. II. Fasc. I. PP. 214-285)

編計七十一頁の間に於て伊國產の「デヤポルチー」屬種百三十種を擧げ、且つ之れに伴隨する既知若くは新發見の「フォーマ」の形式を有するもの六十餘種を附屬せしめ、之れに倣く「フォーモプシス」の屬名を充てられたり、尤も前述の園類編には Diporthe orientalis に伴隨すべき「フォーモプシス」の種名を欠くも「トラベルソ」氏の分類式に從へば多くは、子嚢世代たるものゝ種名を轉用するに在り換言せば、其「フォーマ」の形式を有するものゝ種名の屬名には Phomopsis orientalis と命名するに在り。

予は先年伊太利大學留學中偶々(西ヶ原農事試驗場技師堀正太郎氏は當州諏訪郡宮川村に於て發見せられたる桑樹害園標本として予に送られたり、予は之れを鑑定して新種となし、之れに Phoma niphonii の新種名を附し、其記載及び堀技師送附の顚末の概要を記し千九百四年の同大學報告(Atti dell' Ist. Bot. dell Università di Pavia. 1904)に於て同氏より受領したる他の園類と共に之れを發布したり、其園類は即ち今回青森縣下に發見したる前述の Phomopsis orientalis と稱すべきものと同一種なりし、而して先年堀技師より送付せられたる標本は今に保存するが、其標本に據れば正に「フォーマ」の形式を有するものなり、只だ其子殼の充分に成熟したるは稀なるものなり、而して同技師が一昨年農業試驗場壹等第五號に於て胴枯病の新病園として其病原園を「フォーマ、ヤポニカ」の學名を附したるものは予が先年同技師より送附せられたるものと同一種ならんか、又同技師は前述の雜誌第八號に於て其學名を改正し Sphaeronema mori Hori sp. nov. とせられたり、予は果して之れを、「スフエーロネマ」に改正するの至當なるや否やに至ても予は又發に之れを明言し能はざるなり、兎に角「サッカード」氏が千九百二年に於て白桑に於て發見せられ且つ同氏に由て命名せられたる Sphaeronema mori Hori sp. nov. なる園類は予が伊國園類中其標本を一覽するの榮を有せしが此園類は分類上判然たる「スフエーロネマ」の形態を有するものにして予が先年堀技師より送付せられたるもの及び今回青森縣下にて發見したるものとは全く異なるものなり。

故に予は先年堀技師送付の標本に由て Phoma niphonii と命名したるものにして其子嚢世代たる Diaporthe orientalis の既知名の發見せられたる今日に於ては、予は先人の分類法を襲用して其「ピクニデヤ」世代に Phoma orientalis の新種名を附せんと欲す。

加之其病の進歩したるものに在ては予は又 Liberella 屬に類する分生子世代を屬々發見することあり、之れ或は Diporthe の分生子世代ならんも未だ知るべからず。

兎に角從來 Diporthe 屬の桑樹に發見せられたるものにして判然生物學上園として立論せられしものなきが如し、是れ今後の研究を要すべき問題なり。

露とおき露ときえぬる人の世や
難波のことは夢の又夢

豐公

桑樹害蟲の二新種

學士 農學士 明石 弘
蠶業講習所技師

從來桑樹目蠶蛾科に屬する昆蟲にして桑樹を害するものは左記の五種を擧げたり。

ひとりが　Arctia Caja L.
くはごまだらひとり　D. Diacrisia imparilis Butl.
きはらごまだらひとり　D. Inbrieyseda L.
くろばねひとり　D. intermalis Butl
あかはらひとり　D. ulcoorrea wolk.
うすゝじもんひとり　D. bifoeiatata Butl.
ふたすじひとり　D. obliqua Wolk.

以下該二種に就き調査せる所を記述しやう。

一、ふたすじひとり

然るに余が東京蠶業講習所に於て西ケ原附近に產する蛾科の昆蟲に就き調査せる結果左の二種も亦桑樹を害するの事實を確かめたり。

●形態。

雄は體軀淡黃褐色にして、下唇鬚は基部に於て紅色を呈し、末端は黑色なり、脚部背面に於て大腿節の上部は紅色なり、前脚の基節及大腿節の上部は稍に朱色を呈し、大腿節の末端經節及脛節は黑色なり、前脚の基節及脛節の末端經節及脛節は黑色を呈す。腹部第一節及末節の基節及大腿節の上部は紅色なり、腹部の背面は黑色を呈し、腹部第一節及末端の環節を除き他の環節に於ては黑色を呈す。

雌は體軀淡黃褐色にして、下唇鬚は基部に於て紅色を呈し、末端は黑色なり、脚部背面に於て大腿節の上部は紅色なり、前脚の基節及大腿節の上部は稍に朱色を呈し、大腿節の末端經節及脛節は黑色を呈す。腹部第一節及末端の環節を除く他の環節に於ては黑色を呈す。

●成蟲。

背線側線及亞側線の位置に各一個の黑點を縱列す。前翅には黑色の點紋より成る前中央線あり、其一點紋は翅脈に向つて長く延びたり、後中央線は前線より外線に向つて斜行し中室下角を過ぎたる所に於て銳き角を作り、內方に曲折せり、而して內線に於て一個の橫紋により紋によりて前中央線と連續せり、蛾にありては此等の諸線は更らに巾廣きを常とす。後翅中室に橫脈に黑點を有す。蛾は體長七分四厘翅の開張一寸九分三厘雌は體長七分一厘翅の開長一寸七分五厘強なり、桑葉の裏面に群產せり。

淡綠色にして直徑二厘強なり、一層の塊狀をなす。

●幼蟲。

頭部は淡黑色にして體軀の地色は暗褐色を呈し、第一及第十二環節に存する硬皮板及各環節の突起は更に濃色を呈す、氣門は黑色なり。

第一及第十二環節に存する硬皮板及各環節の突起は更に濃色を呈す、氣門上に於は太き赤褐色を帶び走らし、氣門は黑色なり。

老熟せるものは體長一寸五分幅二分三厘に達す。

繭。

粗薄にして灰色の絹絲と幼蟲の體毛を以て綴り合はさる。

●蛹。

光澤ある暗紫色を呈し、腹面は扁平にして背面は緩く隆穹し、全體に細かき梨子地狀の小點を密布す。體の末端には短剛毛十四本內外を存す。

●經過習性。

此昆蟲は一年二回の世代を營むものにして、蛹は年經せる蛹は五月下旬より六月上旬に於て羽化產卵し、之れより孵化せる幼蟲は六回の脫皮を經て化蛹す、有蛹は八月頃に至り、羽化產卵し、之れより孵化せるものは、十月上旬の頃老熟し、地表に下り、粗繭を營みて化蛹し、其儘越年するものなり、一蛾の產卵數は六百五十乃至七百粒にして卵は桑葉の裏面に產附せられ、幼蟲は孵化當時より三四齡迄は一所に集合群居するの性あれども、成長後は孤獨の生活を營む、蛾は燈光に飛來するの性あり。

二、うすゝじもんひとり

●形態。

雄は體軀淡黃褐色にして、下唇鬚は基部に於て紅色を呈し、末端は黑色なり、脚部背面に於て大腿節の上部は紅色なり、前脚の基節及大腿節の上部は稍に朱色を呈し、大腿節の末端經節及脛節は黑色を呈す。腹部第一節及末端の環節を除き他の環節は黑色を呈す。

雌は體軀淡黃褐色にして、下唇鬚は基部に於て紅色を呈し、末端は黑色なり、脚部背面に於て大腿節の上部は紅色なり、前脚の基節及大腿節の上部は稍に朱色を呈し、大腿節の末端經節及脛節は黑色を呈す。腹部第一節及末端の環節を除く他の環節に於ては黑色を呈す。

●成蟲。

翅は黃褐色を呈し、末端は黑色なり、脚部背面及腹部の側面に於て往々黑線を存する事あり、前翅(面及腹)は黑色なり、前翅の基節及腹部の基節及腹部の背面は黑色なり、腹部第一及末端の兩環節を除き他は紅色なり、背線及側線及亞側線の位置に於て每節一個の黑點を有せり、前翅は第一脈上に於て一黑點を有する事あり、後翅中央線に於て一黑點を有する事あり、第一脈より第四脈の左右に於て第六、第七脈の左右に於て細絲を現はす、翅頂に向つて斜行せり、又第三第四第五の各翅脈の左右外線に沿て小點あり、後翅は稍淡色にして黑色の中橫脈に於て外線に近く小點を有し、又第一第二第三第四第五第七脈の左右外線に沿て小點紋を有すれども、翅頂に近きものは屢消失するとあり、前翅の裏面には點紋より成る外曲せる後中央線を有し、又翅底に近き邊に於て淡き紅色を帶ぶる一般に多少點紋を缺き、或者は只後翅中室橫脈點を有するとあり、雌は體長六分二厘翅の開帳一寸五分八厘雄は體長六分一厘翅の開帳一寸四分あり。

土佐種蠶株式會社桑樹手採取光景

●卵。

淡綠色にして直徑二厘內外桑葉の裏面に一層の塊狀をなして產下せられ裸出にて成蟲尾端の毛を以て蔽はるゝ事なし。

●幼蟲。

頭部は光澤ある褐色にして體軀の地色は灰綠色なり、第一及第十一環節の硬皮板及氣門上線は淡黃褐色にして、背線は細廣く明瞭なれども不鮮明なり、體の各突起より褐色の長毛を生せり、氣門は白色にして、黑色の縁を有し、胸脚は褐色腹脚は、其先端は淡黃白色にして爪に接する部分少しく紅色を帶ぶる。

繭。

灰色の絹絲と幼蟲の體毛とを以て綴らる。

●蛹。

暗紫褐色にして背部は隆穹し、腹面も稍扁起せり、體の末端には十二本內外の短剛毛を有せり。

●經過習性。

此昆蟲は一年二回の世代を營むものにして、蛹の狀態を以て越年し、翌春五月頃に至り、羽化產卵す、此の產卵數は六百五

卵より孵化せる幼蟲は五回の脱皮を終りたる後老熟して地表に下り繭を營み化蛹す、蛹は七月下旬乃至八月上旬に至り羽化産卵し、之れより孵化せるものは、九月下旬、或は十月上、下旬に至り化蛹し、後其儘、越年するものにして一蛾の産卵數は八百五十乃至九百粒なり、幼蟲は孵化せる當時より三四齡に至る迄は集合して棲息するの習性を有すれども、成長するに從ひ、離散して單獨の生活を營む蛾は夜に飛來するの性あり。

一般の驅除法

一、蛾は夜火に飛來するの性質あるを以て誘蛾燈を用ひて誘殺すべし。

二、卵は桑葉の裏面に多少群產せられ、比較的發見に容易なるを以て、之れが採集をなすべし。

三、幼蟲は孵化當時より三四齡に至る迄は群棲するの習性を有するを以て此期間に於て捕殺すべし。

四、寄生蜂寄生蠅を存するを以て、之れが保護繁殖を計るべし。

桑樹の新三大病害〔承前〕

特別會員
農學士理學士　堀　正太郎

此病氣は此迄信越及奥羽地方で凍枯、或は寒枯と云つて居た病氣と同じものであると云ふことが、近來になつて初めて判つた、之に依て見ると此病氣は以前から雪國に廣く蔓延して居たと云ふことは明かで、之れ迄は中刈乃至根刈桑に限られて居つたやうであるけれども、此頃になつては數十年を過ぎた立木桑迄が此害を蒙むるやうになつた、其爲に飛騨の有名なる立水、又岩手縣の九戸邊の大きい立桑も、此ほんの害を蒙むると云ふことを聞いた。

又青森縣農事試驗場の桑園では殺蟲を呈して居るのを見た、九州四國地方にも此病氣があるかないかと云ふことは、未だ調査が屆かぬけれども必ず有るであらうと思はれる、好し現在は桑園は無くとも漸次に蔓延して行くであらうと思はれる、何と云ふ迄でも病害を防ぐ爲めに桑園の增加に供ふて苗木の賣買が盛に行はれ、從て病害を注文し、いてゆくからである、先頃阜縣では或地方に桑園が開て設いたところ、苗を到着して見ると、病園が開かれたと云ふ約束して見ると、苗全部の買入を破棄して居るので遂に其苗を入れて北海道迄送つた會が開かれた際に、奥羽六縣から集つた桑苗を調べて見ても、奥羽六縣の共通の品桑苗の如きは本州の爲め此胴枯病に罹つて居て、或縣の出桑苗の如きは多少增加して居るのである、之に依つて見ても奥羽地方には此病氣が甚しく蔓延して居ると云ふことが明かに知られる、此の如き激烈の手段として居るのであるから、予は當者に對して此病氣を防ぐやうにしなければならぬ、第三此病に罹て枯れるから、併し被害部から飛散して出て來る、併し被害部から飛散して出て來る、新に出來た梢でも早晩發病を免れないのである、故に八月頃より落葉する迄の間に二回ヨリ三回式「ボルドー」液を發病し易き部分に撒布するが宜しい。

本病は根刈、或は中刈桑に普通に見る處の病氣である、病原は「フザーリウム、ラテリチウム」(Fusarium lateritium)と稱する病菌の寄生に依て起るので、此病氣は春の芽出頃に主に芽を冒すのであるから稍膨らだ芽が其儘枯死して仕舞ふ、根刈桑であると下方に新に芽を冒すのであるから下方の芽迄枯れることを思へば、少々位收葉が減つても、施す肥料の品質に充分注意せねばならぬ、第二此病害は其桑を刈取て仕舞ふが良ことがあつて、病菌は芽の附近の組織をも腐敗せしむるから、

ずに居る者が多く、多少知つて居つても販賣に差支があるから隱して居るのである。

扨て何故に此病氣が年々一年に蔓延して來たかといへば、桑の肥培法の違つて來たのが第一次の原因である、從來桑樹の肥料としては寒肥、或は春の芽出肥と云ふ位に止めて、多くは堆肥を與へたものである、然るに近來夏、秋、暖い季節に新芽を勢ひよく伸ばさせねばならぬと云ふ處から、其爲めに桑は軟かく生長する樣になつたから病害に對する抵抗力が減じて漸次に病害に冒され易い事になつたのである、第二に養蠶熱が盛んになつて來て桑園を新設するものが著しく殖えて來たから、桑苗を買ひ入れると同時に病毒が桑苗と共に傳搬したのである。

蠶防の方法は前述の說明に依て大底想像することが出來るのであるが、先づ第一に又枯病と同じいやうに燐酸質肥料と加里質肥料とを充分に與へて桑を强健に仕立つることをせねばならぬ、此爲に枝の伸び方は多少鈍くなり、隱て收葉に多少の關係を及ぼすかも知れぬが、病氣の爲に二三割乃至七八割も枯れることを思へば、少々位收葉が減つても、施す肥料の品質に充分注意せねばならぬ、第二此病氣に罹つた桑樹を見出した場合には其桑を刈取て仕舞ふが良い、阜縣武儀郡の或村の桑園が、昨年此病害に罹つて同部役所は害蟲驅除豫防規則に從ひ期間に同刈取を實行せしめたのである、或桑園の如きは七八割も刈取つて仕舞つた處方でもある、斯く樣に此病害に注意する地方では豫防の手段として居るのであるから、被害者は本年病の發生を認めたならば直に其病梢を刈取て病園の散逸を防ぐやうにしなければならぬ、第三此病に罹て枯れるから芽が直に下方の健全部から出て來る、併し被害部から飛散して病園の胞子が着して居るから、新に出來た梢でも早晩發病を免れないのである、故に八月頃より落葉する迄の間に二回ヨリ三回式「ボルドー」液を發病し易き部分に撒布するが宜しい。

本病は根刈、或は中刈桑に普通に見る處の病氣である、病原は「フザーリウム、ラテリチウム」(Fusarium lateritium)と稱する病菌の寄生に依て起るので、此病氣は春の芽出頃に主に芽を冒すのであるから稍膨らだ芽が其儘枯死して仕舞ふ、根刈桑であると下方に新に芽を冒すのであるから下方の芽迄枯れることを思へば、少々位收葉が減つても、施す肥料の品質に充分注意せねばならぬ、第二此病

長野縣上高井郡井澤村領堀町越藤吉氏吉の模範蠶室

一口噺　我生絲は何故に需要者に非難せらるゝか

梢頭全部が全く枯死して仕舞ふ、此病菌に冒された芽は多く紅色を帯び、又枝の表面に赤き粒狀の突起を生じて皮膚が裂ける、枝の枯れ工合は胴枯病と能く似て居るけれども、病菌の形を見れば直に別することが出來、又少し注意すれば病狀に依ても判然と胴枯病と識別することが出來るのである、胴枯病菌の胞子は單胞で小さいけれども、芽枯病菌の胞子は大きくして新月形を爲し、中劃が三個乃至五個位ある、此病氣と胴枯病と交つて同じ畑に發生することがあるから、春の芽出當時に桑の病か木病か何れかの害を被つたに相違ないから、顕微鏡で覗るか或は肉眼で病菌の所在部を精査して、之を區別するが宜しい、本病の豫防法は胴枯病と同じことである。（完）

一口噺

備後　天外

子供『モシお父さん、蠶が桑を食べないで繭をかけると得ですね』

父『さうさ、お前も學費なしで大學者になつてくれるとよいけれど』

我生絲は何故に需要者に非難せらるゝか

通常會員
蠶業講習所技手　松下憲三朗

我國の蠶業は近時長足の進歩をなしたことは、統計上明かなる事實で其產額に於ては未だ支那には及ばぬけれども、既に伊佛を凌駕して尙數段の進歩發達をなして居る、殊に我横濱の市場の生絲の市況は延て世界の生絲市場に波動を及ぼす、一大權利と勢力を有し、實に世界生絲界の中心點となつてをることは能く知ることろである、外觀に於て既に然り尙其內容に於ても喜ぶべき現象が多々發現しつゝあるので、我蠶絲業の將來は實に有望なる曙光に浴しつゝあるのは洵に慶賀すべきことではありませぬか、其喜ぶべき現象とは何であるか。

第一蠶絲業に關する學理的研究が著々其歩を進めつゝあること。

第二蠶業教育機關が益々擴張せられ、其設備も益々完成するの機運に進しつゝあること。

即ち蠶絲業に關する學理的の研究は今日既に伊佛に比して確かに一段の進歩をなして居ることは明かなる事實で恐らく世界に冠たることは、識者は既に認めてをる、教育機關に於ても夫々系統的の設備があつて、年々研究せられたる事項を講習し、又は教授して以て全國に普及しつゝあるので、是等の卒業者の我蠶絲業界に貢献せる効績は實に餘大なるものと云はねばならぬ、歐洲にも蠶絲業に關する教育機關はないではないが、我國のものに比べると到底同日の論でない。

如斯我蠶絲業の基礎は益々堅固で益々發展の機運に向ひつゝある今日顧り其生產したる生絲の品位が粗惡で（全般ではない中には中々優等のものもある）往々需要者から其缺點を指摘して忠告を與るか如きことあるは蓋だ遺憾とする次第である、又大に研究すべき問題ではあるまいか、今試みに彼の機業地として有名なる里昂市場に於ける各國產生絲の相場を調査するに左の通である。

佛蘭西

伊太利（ピエモン）	五二、五
同　　分	五二、〇〇
ブルッサ	四六、五
支　那	四七、五
日本器械絲	四七、五—四八、〇

我生絲は何故に需要者に非難せらるゝか

廣東器械絲	三六、〇—三六、五
ベンガル器械絲	三四、〇—三六、〇
支那器械絲	五一、五—五二、〇
支那七里絲	三七、五—三八、〇

即ち我生絲は伊太利及佛蘭西の產に比し、又支那器械絲に比し其品位の劣れるか爲價格の低廉なることは明かである、吾等は我生絲が「ペルシャ」や「シリー」や又支那の廣東や七里絲に優つて居るものを以て決して滿足すべきものでない、どうして伊佛に比し上に優等の地位を占むるやうに力めねばならぬ。

そこで我蠶絲業が學術的の研究に且つ教育に果た又實業の奬勵に、且つ發展に極力勉めつゝあるに係らず、なぜ生絲の品位が彼に及ばぬか、之れ大に攻究せねばならぬ問題で決して匆々諸に帰すべき事柄でない、敢て需要者の忠告を受くる迄もなく自ら三省せねばならぬ。

我生絲の品質が優等でないと云ふ、其原因は種々あるけれども、予は左の二項を以て主なるものと考ふるのである。

第一、原絲の品質が不良なること。

第二、製絲上に學理の應用が行はれざること。

第一の項目は是れは是非共養蠶家諸君に猛省を煩したいのである、即ち本邦は支那や伊佛のものに比して品位が劣等である、即ち解舒が惡い、絲長が短い、繊度が割合に太い、類節が多い、抱合が悪い、強伸力が少い、等の缺點があるが、此繊減の少いと云ふことは、絲膠の少いが爲めで絲膠の少いのは我生絲をして抱合を不良ならしめ強伸力を減ずるところの

一大原因ではあるまいか、予輩は此點は其裏面に大なる缺點の伏在する反證ではないかと常に憂慮するのである。

由來繭買の改良と云ふことは隨分古くから之を耳にするけれども、未だ吾々の理想を滿足せしむるこの出來ないのは何故であろうか、是は又種々なる原因の存在するものあれども要するに蠶の種類が適切でなかったからであろうと思ふ、支那の種類、伊佛の種類を試みに其繭を取り地繰絲を行ひ且つ是れより得たる生絲を一見せば蓋し思ひ半ばに過ぎるものがありましょう、予輩は伊佛や支那の蠶の品質を褒めるのである、伊佛の品質を支那や伊佛に比ぶれば氣候が常に濕潤なるが故に其解舒を不良ならしめ且つ繭の品質を多くして生絲の品質を貶するに至るのである、如斯我國の繭は其品質に於て到底伊佛のものに及ばぬのは實に遺憾極まる次第である。

第二の項目は是非共製絲家諸君に來製絲業に關する學術上の研究は餘程後れてゐる着手せられ、從て日向淺き將來益々其歩を進むひるの地は緒々として餘蓄があるが、而かも既に研究の結了したるものの決して勝くない、然るになぜ之が實地に應用せられぬであろうか是らずんであるが、要するに製絲業の敢て遺憾に堪えないと、當業者諸氏の内には自分の經驗によりて得たる自信力が强くして少しも他を顧る暇がなく所謂保守的であって良法を多方面に求めて採用するに吝なるは丈けの進取的氣象に乏しいのとが最大なる原因ではあるまいかと信ずるのである。

我國の製絲業は其學理上に於て又技術上に於て種々研究せられてゐることは決して伊佛に劣てはをらぬ、否寧ろ大に進んでゐるのである、然るに之が一般に應用されないのは實に遺憾極まる次第ではあり今其一端を擧へると、蠶の種類の適切でなかったことは、蠶の方法は粗雜極まるなく、爲めに病質を知らずして、蠶の間に損傷せしめ、工場の管理は散慢極まりなく爲めに工女が其業務に對して忠實と熱心とを欠き、製絲の技術は各自思ひ〳〵に其流儀を異にすると云ふ有樣で、之が爲め技術損害を蒙ることは實に悲しむべきなくなり、養蠶に於ける蠶見一回一寸各地方を巡回して二三の製絲場を見たのみで直ちに之を要するに我生絲の品質が伊佛のものに常に一歩を讓り需要者から時々苦情の聲を耳にするのは原繭の品質のあるのと製絲上に學理の應用が行はれざるが爲め其技術が區々にして從て生産の生絲が粗雜であることに歸着するのである、當業者諸君よ之に改善すると同時に一大奮發以て生絲品位の改良に勉められんことを切に希望するのである。

心に張認なき時は物なをこなふ
張認するときは物なをしのふ

徳川家宣

蠶絲業發達の基礎を論ず

通常會員
東京蠶業講習所技手　小松嘉藏

社會の文化進歩に伴ひ生活程度益々向上し進歩するに從ひ繊維物の需要愈々多きを加ふ、從て生絲の需要も亦年と共に増加するは、是れ現下の狀況にして未だ嘗て生産過剰を見ず、手藝を以て是れを賄ひ得たるは、是れ又其原因一にして足らずであるが、要するに製絲業の敢て遺憾に堪えないと、當業者諸氏の内には自分の經驗によりて得たる自信力が强くして少しも他を顧る暇がなく所謂保守的であって良法を多方面に求めて採用するに吝なるは丈けの進取的氣象に乏しいのとが最大なる原因ではあるまいかと信ずるのである。

我國の製絲業は其學理上に於て又技術上に於て種々研究せられてゐることは決して伊佛に劣てはをらぬ、否寧ろ大に進んでゐるのである、然るに之が一般に應用されないのは實に遺憾極まる次第ではあり今其一端を擧へると、蠶の種類の適切でなかったことは、蠶の方法は粗雜極まるなく、爲めに病質を知らずして、蠶の間に損傷せしめ、工場の管理は散慢極まりなく爲めに工女が其業務に對して忠實と熱心とを欠き、製絲の技術は各自思ひ〳〵に其流儀を異にすると云ふ有樣で、之が爲め技術損害を蒙ることは實に悲しむべきなくなり、養蠶に於ける蠶見一回一寸各地方を巡回して二三の製絲場を見たのみで直ちに之を要するに我生絲の品質が伊佛のものに常に一歩を讓り需要者から時々苦情の聲を耳にするのは原繭の品質のあるのと製絲上に學理の應用が行はれざるが爲め其技術が區々にして從て生産の生絲が粗雜であることに歸着するのである、當業者諸君よ之に改善すると同時に一大奮發以て生絲品位の改良に勉められんことを切に希望するのである。

昨年に於る生絲の輸出總額の如き實に一億一千六百萬圓を算するに至れるは世人の知悉する處なり、如斯我蠶絲は長足の進歩をなし來りしと雖も尚改善を要するの除地なきにあらず、然るに既に弊害の顯現するものあるに至れり、徒らに是を樂觀する如きは洵に事の全豹を知らざるの至りなり、彼の產額の如きは單に生產の現象のみにして、少しく斯業家の內情に立入り其經營狀態を觀察せば、國家の經濟上將た感慨に堪へざらんものあり、是れ果して如何なる原因に依るか、吾人の須く研究すべき問題なり、余輩が見見を述べんとする所以茲にあり。

其原因一にして足らずと雖も第一に蠶絲業組織の不完全に歸せざるべからず、抑も現今に於ける斯業界の經營狀態を見るに、未だ其幼稚の域を免れず、爲めに發達隆盛を期するには先づ蠶絲業界に於ける是れ根本的組織を改善するにあり、而して蠶絲業界の發達隆盛を抑も養蠶家は蠶絲業の基礎にして家産の興廢に關し、製絲家の損益は直接間接に養蠶家に影響すること大なり、然るに現今兩者の關係を見るに種々の弊害の經綸するあるのみ之を試みに是れを述べん。

(一)、製絲家の原料仕入に就きは是れを見るに製絲家は我國產の繭買を可成價格の低廉なることを欲し、養蠶家は可成價格の高價なることを欲す、但し買却せんとする唯一の調和剤たり、抑も養蠶製絲の業たる、全國に到る、處斯業の有たれざるの地なく、桑園を見ざるの地なし、然り而して近來養蠶家は自然の勢にして不得止ことなりと雖も、商機に投ぜんとするの結果、往々產繭買數の增加を圖ると、

生繭の早揉をなし、以て暴利を貪らんとするもの少からず、否年を追て益〻多きを加ふるの傾向あり。

夫れ繭の早揉きは世人の知る如く、未だ変分蛹化せざるを以て、繰上種々の障害を惹起し絲量を減じ品位を劣等ならしむ、其損害や實に繰少ならず、試みに生繭百貫目の取引ありと假定すれば、早揉き繭は一貫目に付き約八十匁の差あるは明かなる事實にして、一貫目に付き五拾匁と見積るも、養蠶家には不正の賣上價格四拾四圓を貪るに至る可し、故に製絲家は勢其價格を減じて、是れを購入するは不利止なり、然れども市場の競爭は時に或は價格の低減を實にする能はざる事あり果して是れを低減して購入すると雖も、其絲量等の相違あるに至りては、國家經濟上の不幸と云はざるべからず、製絲家中或は申合規則等により種々是れが矯正の策を講ずるものありと雖も、未だ其効果を實現せしものなきを遺憾とす。

洛南郡長山村野縣知事管轄内蠶業視察團として巡視の際の
同縣村山社に於て記念の爲撮影せられたるもの

(二)、社會經濟事情を考慮し、複雜となり時間と勞力とを省略せんとするの結果、製絲家は原繭購入に際し、仲買の手を經る事を多きに至れり、是れ現時所謂分業の發達に伴ふ現象なる可く、其だ慶賀すべきも、分業は必ずしも絶對的効果を收むるものにあらず、原繭購入に關する仲買人の如きは殊に其弊害の大なるものなり。

夫れ生繭は一定期間を經過すれば出蛾を發し、其時日の長短に依り、繭汚染繭等の數量を增加し、品位を下落せしむるものなるを以て、養蠶家は一般に是れが危險を免れん爲往々其時價の如何を問はず賣却するの止を得ざるに出づ、而も仲買商は其弱點に乘じ、度外の價格を以て買求し買止めを行ふ等し、或は繭殆んど至らざるなし、是れが爲養蠶家は往々是れが奸策に陷り、辛酸を嘗めざるに至る、固より仲買商人と雖も、要す

るに養蠶家製絲家との間に介在し、其弊害を醸す源泉たりと主張するを憚らず。

(三)、抑も如何なる製造工業を問はず、其原料が製品及事業の經濟に及ぼす影響尚に大なるものあり、若し其原料にして粗惡不整ならんか、如何に精巧なる機械熟練なる技術を以てするも、到底良の製品を產出する能はざるは、吾人の識る所なり、若し强て粗惡なる原料を以て精巧なる製品を得んと欲せば、多大の勞力と生產費とを要し、收支相償はず到底事業の隆盛發達を期す可からざるなり、現今海外機業界の現狀を見るに、機械の精巧と其規模の大なるとは意之我製絲家も亦商品として價値を向上するが爲には、其要求に應ぜざるべからず、近來製絲家が此點に注目するに至れる傾向あるは尚に喜ぶ可し、然り是れが實現を期せんと欲せば須く先づ製絲家に供する整一原料を以てするを企圖するに非らずんば、到底斯業の發達を望むべからず、從來繭の雜駁なるは我國蠶業の缺點にして、是れが爲乾繭工程及繰絲工程、繰量品位等に多大の惡結果を及ぼせるは、夙に世人の熟知する所にして、先覺者の蠶種の專賣を主張し、又蠶種の配布を唱導する故なきに非らざるなり。(未完)

ジーピーマーシユ

文明とは自然と絶えざる戰鬪なり云ふ

生きたる萬國大博覽會

本會特別會員
日本大博覽會々長　子爵　金子堅太郎氏談

編者一日金子子爵を長爵邸に訪ひ日本大博覽會に關し左の談話を聞き得たり掲げて會員諸君の參考に資す

實質に於いては萬國大博覽會

"四十五年度に於いて開設せらるべき大博覽會も一夜明けたる今日となつては早や四年の後に迫つて來た。五千萬の同胞は何れも曾て此博覽會で平和的戰捷を世界に博し得たいと望んで居るであらう、併し漫然と之に處するは此の目的を貫徹する上に於いて決して策の得たものではない、必ずや此に今度計らし樂を立て、十二分の美果を收めねばならぬ。殊に今度の博覽會は名こそ日本大博覽會であれ、其實質に於ては實に萬國大博覽會であるといつて宜い、從つて如上の注意の拂はるるといふことが最も必要である。曩に政府が此の大博覽會開催に就て海外諸國に贊同を求めたところが、皆何れも雙手を擧げての贊成で、米のコルーズゲエルト氏の如き東洋に於ける强大なる新興國が其の樣な大博覽會を開催するならば大に

卒先して其の成功に應援を試み様と迄言つて來て居るのである、從つて他の諸外國も亦大に之れを替同し、軈て其の時期ともならば兩分の勸誘を試み以つて東洋未曾有の大博覽會をして充分なる成功を遂げしめ様といふ意氣込を以て居るのである。思へば此度の博覽會は我が建國以來の壯圖で啻に本邦の文化を知らしむるのみならず。我産業が如何なる實力を有して居るかを示すものである。而して此博覽會には西からも東からも其他の各國より多く出品があるに違ひない、從つて其の性質は勢世界的とならざるを得ないのである。

特色ある博覽會たるを要す

四十五年の大博覽會は我國建國以來の壯圖で其實質に於いて萬國大博覽會であることは以上の如くてある。然るに從來の博覽會と稱せらるゝものは皆歐米の摸倣若くは踏襲で、何にしても一國の粹を聚め萃を拔いた博覽會に、東洋の最强國と誇る大和民族固有の國民性が發揮されて居らぬ、之は博覽會の性質からいつても、又一國の產業を世界に紹介する上に於いても甚しい遺憾であると思ふ。併し乍ら此の弊は必しも我國のみでなく世界何れの博覽會も此の點に於いては皆同一轍に出てて居る、從つて甲國の博覽會と比較して見てさてあまり利益といふものがない、甲國の博覽會は乙國の博覽會に見られぬところを見せ、乙國も亦甲國の仕得ぬことを仕てこそ始めて博覽會の本能が表はれるので、博覽會たるものは只品物を陳列して多數の人に見せさへすれば、それでいゝといふ譯のものでは決してない。自分は此意義に於いて四十五年度の博覽會をして特色あるものたらしめんことを希望して止まぬのである。然らば如何にして此の特色を發揮して宜しいか、茲に二つの材料がある、曰く一は古美術一は蠶絲業……即ち之れてある。

大分縣別府の全景

蠶絲當業者諸君に囑す

我古美術は建國二千五百年の我が國美と「コンデンス」した逸品である。而して世界一品である。日本が美術國として世界に於ける重要なる地位を占めつゝあることは爭ふべからざる事實で、又實際に於いて日本は大に誇るに足るべき美術を有して居る、此くの如く誇るべき美術を有し乍ら、之を徒らに櫃櫥の間に秘めて置くのは如何にも智惠の無い話である、若しも一定の形式によつて之等の美術品を世界に紹介したなら、其裨益は果して

どれ位であらう。自分は切に此古美術を以つて我特色ある博覽會を建設したいのである。而して更に一つは蠶絲業である。日本の蠶絲業は何人も知る如く古來農家の副業として尊重され、明治の代に入つて更に輸出貿易上の重鎭となつてゐる、今日の所世界の蠶業國中其の産額の最も大なるものは清國で、之れに次いでは日本、伊太利、佛蘭西である。併し乍ら品質に於いては佛蘭西、伊太利、日本、清國といふ順序で我が國は産額に於いてこそ世界第二位であるが、品質に至つては更に一籌を輸して居る。今日世界蠶絲國の大勢は大凡そ上の如くであるが、我國に於いても近時に於いては佛伊に劣らぬ優等品を産出するに至つたので、大に至囑に値するが、併し乍ら此の如きに安じては成らぬこと勿論で、益々發奮することが必要である。元來日本は他の蠶業諸國と異なり所謂四面環海の島國であるので、凡べての事情に特殊のものがある。從つて之れが飼育の上にも亦た特殊のものがなければならぬ。即ち之れによつて、國家經濟上の勝利は何程でも博し得らるゝので、夫れには先づ養蠶、製絲の發達が必要である之れを演繹して見ると近時我國に於ける蠶絲業の發展も亦此の二者の發展より來つた結果でなければならぬ。自分が蠶絲業を日本の特産物として大博覽會を粉飾せよといふのは即ち此の點てある。我國に於ける特殊の飼育法及製絲法が如何なる經路を經て如何なる形式により如何なる實質を保ちつゝ如何に發展し來つたかといふことを、此の博覽會に於いて世界に紹介するのは以つて日本の大博覽會をして、特色ある萬國大博覽會たらしむる所以ではあるまいか。而して之れを示すに就いても相當の考案が必要である、只漫然と羅列したばかりでは何の反應もないばかりでなく、反つて母國の蠶絲業を偏するものである。然らばどうしたらいゝか、其の最良の方法としては隨分あらうが自分は先づ催青、孵化の掃立より蠶兒各齡飼育、上蔟、結繭の狀況及產卵、製種、蠶種貯藏の有樣を系統的に示し、又一方には原繭より殺蛹乾繭、製絲、荷造等を示し更に又之れより得るところの織物迄も順を追ひ序を正して種々の形式によつて有趣味的に配列したら頗る妙であらうと思ふ。殊に織物の如き同一の原料で出來た内外の織物を並列したならば、彼我の製織的技術の巧拙も能く判つて之を觀たる外人は必ずや多大の趣味を以て迎へるであらう、我同業者も亦た之に依りて大なる教訓を受るであらう、即ち同じ日本の生絲を使用し乍らも、佛英伊獨米等の進歩したる機業地で織つた織物は、光澤と云ひ色合と云ひ手觸りと云ひ無限の趣味を持つて居るにも拘らず、内地で出來た品物は之之であると云ふことが一目の下に直に比較し得らるゝから、學理を巧に應用するとせざるとに於て此の如き相違が有るのであると云ふ考は何人も起すであらう、茲に初めて改良の端緒が開け研究の思想も發達するから博覽會開設の目的も優に達し得らるゝ次第であるのみならず、如此組織的に系統的に一新機軸を顯して我蠶絲業品を陳列したならば萬里の波濤を超えて來れる外人も何よりの土產が出來たと必ず喜ぶに相違ない、然るに若しも之に反して出品も陳列の方法も從來に變つたことがないとすれば彼等は必ず失望するに違ゐない。其失望した結果は軈て我國の異信に疑を入るゝことになつ

て、折角今日欧米の市場に於て博覽會に陸離たる名譽も、或は之が爲に陸離たらしめんか、兎に角其欧州の方法には鋭意考案を凝らして、從來の如き死したる博覽會を繰返して、所謂生きたる博覽會と尊したいのである。乍併此生きたる博覽會は一部の人の力では到底爲し得ないであるから、政府が之に全力を注ぎ、殊に蠶絲業家は新に絶大の計畫と辛酸とを以つて之に當られたいのである。四十五年……永い樣でもあるが光陰は白駒の隙を過ぐるが如しである。天下の[illegible]準備を怠らずして、來る明治四十五年に開催せらるべき日本大博覽會に就て和田事務總長が識者に語られたる意見の大要を記すれば左の如し

日本大博覽會の出品に就て

本會特別會員
日本大博覽會事務總長　和田彦次郎氏談

日本大博覽會開催の目的

世界の強大國たる露國と戰ひて大捷を博し得たる我邦に對して、出品するが爲に特に少數の優等品を製造するが如き過弊を打破する目的で出品者の資格は凡て其業を大規模に經營する者とし、小製造、小業者を遠ざけて、出品數量を改め、且つ出品者の資格は之を避けたいと思ひます。去れば博覽會の爲に特に僅かの、物を拵へて從來の自然の姿を絶つようと巧むやうな野心家も自然淘汰を免れず、其の生産者が深く出産に優劣を闘はすことになり、其中から出品として互に興ふる褒賞は物の中から出品として互に興ふる褒賞は改善進歩の上に興ふる褒賞は悉くないことであらうと思ひます。之でなくては到底博覽會其物の目的を達することが出來ないのであります。

蠶絲部の設置

そこで旭日昇天の慨ある新興國の名を博せる我邦の開設に係る博覽會のことであるから、諸外國からの出品も定めしし倘其實力如何を疑ふて居る者が尠くないやうであります。故に吾々國民は戰後の經營として、國力の涵養に努むると同時に、我邦に於ける實業の發達生産力の增加、海外貿易の發展が如何なる程度に在かを、世界各國に向て紹介せなければならんのです。夫には萬國大博覽會を開設するのが一番宜しいとの意見を持て居る人も多くあります。現に帝國議會及全國商業會議所は萬國博覽會の開設に關し建議した位であります。併し萬國博覽會となると、其規模が頗る大きくなると共に、設備の如きも尋常一樣では出來ない。强て開いて開けようともあるまいが、我邦の現狀に於ては萬國の二字を冠して大袈裟に博覽會を開くと云ふよりは、博覽會以外の諸般の設備が伴はんから、先づ是は見合はせとして、名は萬國とせざるも其實に於て大に價値あるものとし、戰後の記念として此種の博覽會を開いて、我邦の生産物を諸外國に紹介し、併せて海外國の生産物を我國民に紹介して、多々益々我實業の發達を圖らねばならぬと云ふので、來四十五年に日本大博覽會を開催することになつたのです。名は日本大博覽會とでも其實質に於ては萬國博覽會の積りで、諸外國にも其出品を勸奬して居ります。故に官民協同舉國一致設備の完成を期して、充分我實力の存する處を世界の人々に紹介したいものであります。

蠶絲部の設置

そこで旭日昇天の慨ある新興國の名を博せる我邦の開設に係る博覽會のことであるから、諸外國からの出品も定めしを以て笑を招かぬやうにせねばならぬ。殊に此博覽會は外國人の出品は別として、他の出品は凡て我國民の生産品に限るのであります。國內の生産品としては蠶絲品の如き最も重要の位置を占めて居るのですから、博覽會丸物に出て來る外國人も、定めし之に對して一層の注意を拂ふことであらうから、蠶絲業に從事する人は充分準備をして、日本絹絲の特長を全世界に紹介するやうにせられたい。尤も之に就て大日本蠶絲會から蠶絲館を特に設けられたいといふ建議が出て居ります が蠶絲館建設の事はとうなるか、まだ極まりませぬけれど、蠶絲館丈けは必ず設くることになるだらふと思ひます、即ち蠶絲に關する物は凡て此館に蒐め、蠶種から蠶兒、蠶兒から生絲、生絲から絹織物とズムやうに、系統的順序を正しく陳列し、一目の下直に其經過の模樣を知ることの出來るやうになるでありませう。

肥後阿蘇山の全景（其一）

出品者の資格

夫れて其出品物に對しては從來の博覽會や共進會などのやうに、出品者が爲に特に少數の優等品を製造するが如き過弊を打破する目的で出品者の資格は凡て其業を大規模に經營する者とし、小製造、小業者を遠ざけて、出品數量を改め、且つ出品者の資格は之を避けたいと思ひます。去れば博覽會の爲に特に僅かの、物を拵へて從來の自然の姿を絶つようと巧むやうな野心家も自然淘汰を免れず、其の生産者が深く出産に優劣を闘はすことになり、其中から出品として互に興ふる褒賞は物の中から出品として互に興ふる褒賞は改善進歩の上に興ふる褒賞は悉くないことであらうと思ひます。之でなくては到底博覽會其物の目的を達することが出來ないのであります。

團體組織と出品の準備

し之に依ると大養蠶家や大製絲家は出品するとが出來て、蠶絲業の中堅ともなるべき小養蠶家や小製絲家は出品することが出來ないことになるから、これでは發揚の趣意に反するではないかと批難する人があるかも知らぬが。小養蠶家や小製絲家に出品させぬと云ふのではない、之等は何組合と何團體とか云ふものゝ組合員又は會員となつて出品して差支ないことであるから、博覽會迄には夫々團體を組織して出品する準備をするが宜しい。殊に產業組合の如きは養蠶製絲に從事して居る人の爲

には極めて有益の機關であるから、豫て蠶業組合法に基づき農商務省で示してある模範定款に習ひて之を組織し、依て以て其事業の改良と共に、充分に技能を伸ばし何組合員と云ふ肩書の下に、堂々出品して名譽の賞牌を得られてはどうであるか、這は特に蠶絲業者に留む處であります。御色々御話ししたいこともありますが、他日に讀り今日はこれだけに止めておきませう。

一口噺

地

甲斐桃雲

甲　『朝鮮は世界第一の寒い國だらうな』

乙　『そんなことがあるものか』

甲　『それでも寒國（韓國）と云ふてはないか

蠶絲業家と衛生

醫學士　石原喜久太郎

爲臨本會編輯主任加藤知正君來訪せられ、本會報の爲めに衛生に關する卑稿を揭載せんことを需めるら、余は蠶絲業に就きての實地上の知識、乏しきが故に、特に本會員諸君を滿足せしめ得るが如き有益なる記述を爲すは覺束なく、之を以て、之を辭したれども、君固く取て之を許さず、尊々として本業者諸君に衛生知識を普及すべき必要を說て已まず、余も亦本業が我邦殖産業上極めて重要の地位を占め、一國の富利を增進するに於て至大の勢力を有するを知るが故に、又余は富業者の健康と否とは其收利の結果に多大の影響を及ぼし、延て國益上の利害に直接關係を現はし來るべきを信ずるが故に、微又余自身にありても是迄經驗せざる斯業と直接間接に關接するに於ては特殊の知識を得らるべしとの興味を感じたるが時に自分等の身體の衛生に注意せざるべからず、諸君の健康を重んじ、疾病に罹らぬ工夫を爲し、十分に働きて、良き繭を收めざる可からず、例へば有蠶を飼育する場合に、氣候未だ暖かならず、蠶室の溫度を高むるの必要ある時、爐の構造惡しくして、燃料の燃燒產物たる炭酸瓦斯や一酸化炭素の如き有害瓦斯室內に充滿し、其爲めに諸君は之を呼吸して頭痛や眩暈を起し、執業に堪へ難き事あらん、即ち諸君の健康を害して十分に業務に奮勵すること出來ざるべし、果して然らば、其結果、斯業の收益に影響を來す、是は見易き事なり、これを改良し、蠶兒の成育に適すると爐の構造とを同時に、人體にも害なきやう工夫すべし、是れ何によりて出來得るやと云へば、即ち衛生學の知識によるのほかなきなり、衛生とは人類の健康を保護し壯にし、疾病を豫防し、天然の壽命を全ふすることを云ふ、衛生學とは之を目的として研究する實驗科學なり。

車の起るは其起る日に起るに非ず、事故に、從に加藤君の厚囑に應ずる事となれり、而して、若し會員諸君が衛生思想を會得し、これを其實地に應用せられ、諸君の健康を謀り、故障なく十分に業務に從事せられて邦家の利益を增進せられ得るならば、是れ實に衛生の目的を達したりと云ふべきものなり、然れども余不肖、到底諸君を滿足せしむること能はざるは深く自から慚愧に堪へざる所、且つ公務の閒暇に乏しければ、本會の爲めに微くすの時間も十分ならず、此點は豫め諸君の高恕を願ふ所なり。

諸君が養蠶せらるゝに當り、其直接の目的は、健全なる蠶を育成し、良好なる繭を多分に收むるに在るべし、其爲めには、蠶兒の生育上能く之が健康に注意せざれば種々の疾病、殊に傳染病に侵され其結果十分の收繭を見る能はずして損失を來たすなるべし、故に諸君は必ず蠶の衛生の爲めには深き注意を拂はるゝこと明かなり、例へば蠶室を設くるには其の地位高燥にして東南北の三方を開通し日光の照射を良くするは勿論空氣の流通の宜しき場所にあらざれば不可なりとか又蠶室に氣拔を設くるとか、或は又、給桑の注意を要し、室內溫度の如きも一定の標準あるは、普是れ蠶兒の衛生を計らんが爲めなり、而して、諸君は是れと同

大分縣六分町春日浦の影

の成るは其成る日に成るに非ず、事果を來すべきの伏在するなり、即ち病氣に罹りて、始めて、醫し、換言すれば健康を害し、

御の治療を受く、而も、其以前の日常の衛生に注意し健康を重んじ疾病を發せぬ工夫に遺憾なく力を注ぐ者は鮮く、人事凡て此種の事多し、然れども、我邦の殖産上、諸君の地位は重し、高し、諸君は獨り自己の爲めに健康ならざる可からざるのみならず、國家の爲めに健康を期すべき責任あり と信ず。前に引用する例は單に養蠶に關する點のみなるが、此ほか、又絲繭業に於ても諸君は大に勝想せらるゝ所あるべし、例へば製絲（職工）の衛生は是れなり、職工衛生の重んずべきことは稱後廻（略）說く（所）あるべきが、彼の綿絲の紡績工女などには、その寄宿舍（屬々）傳染病の便襲を蒙りて、當業者が多大の損害を受けし實例に乏しからず、去る三十五年の東京押上の瓦斯紡績、永しては錦淵紡績、昨年末の大阪合同紡績の如き「ベスト」病の侵入を受け、會社の職工場、職工を襲へし例も亦多し此ほか、他の種類の傳染病が工場、職工を襲へし例も亦多しとなす、傳染病の爲めに由て起る處の損害の痛劇なる苦き經驗を得たる會社は、如何にせばこれを豫防し得べきやを講究し、其の結果、工場、寄宿舍等の衛生上の設備をなし、また職工の衛生學的傳染病學的檢査所を構内に設けて傳染病の豫防撲滅を爲せる所あり、總じて傳染病に限らず、職工の疾病によりて生ずる執業の減少は收利の減少を來す事は多言を要せず、職工をして無病健全ならしむる永く收利を見るの基にして、是れ取りも直ほさず職工の衛生を重んずるに因るの他に策無きなり、多くの人夫若くは工男工女を使用せらるゝ諸君がまたかゝる點にも留意せられんことを切望するものなり。

一口噺

天

茨城　鬼外

甲　「あの機屋は皺のよつた老工女ばかりだね」

乙　「その筈さ縮緬の機屋だもの」

衛生の重んずべき必要あるは簡略ながら上述によりて概要を知し得らるる可し、然らば如何にせば是れを實地に應用し得らるべき乎、そは、先づ衛生思想即ち衛生學に關する學理を了解するを要す、然れども余は諸君に向つて、學校に於て講義すべきが如き衛生學を說き始めんとは欲せず、可成は諸君の實業に關係ある事項に就きて研究し、之に對する衛生的の說明を與へ得んことを主とせんと思ふなり。

秋蠶の話

學藝員
蠶業講習所技師　土屋泰

●雨桑の害　●雨天の際貯桑の盡きたる場合は、春蠶季にても秋蠶季にても困却するけれ共、殊に秋蠶季には困難を感ずるのであります、雨天の永く繼續する年に於て、蠶の不作するのは、蠶室内が多温にして、爲に種々の際害を釀すのみならず、乾きたる桑葉を得難き事も、慥に一つの原因であると云ふて宜しい、故に此際に處する方法をも、豫め講究して置かねばならぬ。

●貯桑の盡きたるときは雨桑を摘み入れて、之を乾すことに力を盡すは云ふ迄もなかり、到底充分に雨滴を乾く迄待たれずして、雨滴の尙乾かざる桑を與ふるの止むを得ざる場合が屢々あります、此際注意すべきことは、單に蠶の愛に溺れて一時に多量に與へぬ樣にすることである、雨滴の少しく與へて蠶の食慾の半ばを充たす位の程度に止めて置きますれば、爲に發病せしむる樣のことはない、然るに只蠶の飢ゑるをのみ憂ひて、一度に多量に與ふるときは、却て發病せしむるのであります、然らば桑量を減少する程度如何にと云ふに、平時の半額位迄を標準として宜しい、平時に於ける半量の桑を、平時の回數に倣ふて與へるのである、斯くすれば、食桑量が少ないから、鬱屑の薄いのは免れぬけれ共、病產を出かさぬから、結局桑は蠶の衛生に有害としてあります、通例の場合に於ては、是を疑ひない事實である、然れ共此說を早呑み込みして、如何なる場合でも露桑を與へれば、蠶の健康を害するものと信ずるは誤りである、氣温が九十度内外に昇ると乾温計の差が拾五六度もあるときは、蠶は暑さに苦しみ其上に桑葉の水分が過度に發散するから、蠶の生理上自然水分の不足を感するのであります、吾々でも氣温が高くて空氣が乾燥する場合は、著しく渴を覺えます、醫師の調査に依れば一人一日中の尿の排泄量は平均八合二勺餘なりと云ふことです、而して呼吸作用や皮膚の面より發散する水分が、之と同量で兩者を合すれば、實に壹升六合餘になるのである、蠶の排泄する水分量に就ては、未だ精確に調査した者がないが是亦一定量のあるは疑を容れぬ、然るに桑の水分が減少し、一面に於て皮膚面から發散する水分が多くなれば、自然體内の水分に缺乏の爲に、生理的作用に異常を來す譯にて、故に前陳の如く高温乾燥のときは、臨時少量の清水を桑葉に撒布して與ふれば、幾分か暑さを凌ぎ易からしむると同時に、體

内の水分缺乏をも防ぐことが出來る、是は理窟の上から推論したのではない、事實に於て前述の如き場合に遭遇せしとき少量の露を施して與へたものか、否らざるものに比して發育が良好なのであります、此等が所謂機應變の處置であります、又晴天の際早朝に拵入れた桑には多少の朝露があります、此等の露桑は日の中に至り、溫度が昇り空氣が乾燥してから與へるには、至極適當である。

以上露桑に關し述べたる處は、主として五齡期に就ての話しである五齡以前即ち幼蟲として與へる間は露があります、葉が結着して取扱上甚だ困難であります、四齡迄の間に高溫乾燥の氣候に遭遇したならば、及ぶべく次新鮮なる桑葉を數々與へるより外に良法はありません。

泥桑の害

此事は敢て夏秋蠶に就てのみ述ぶべき事ではないが、夏秋蠶には春蠶用の桑園から稚桑や下枝などを取り拵めて與へますから、自然泥桑を摘採して用ゆることが多いのである、故に泥桑が蠶に如何なる害を及ぼすかに就て、特に茲に述ぶることゝ致します。

元來泥土は、蠶に對して毒性を有するものではない、故に其量が少なければ、蠶が食しても害を認めぬ、然れ共亦發ひ

三重縣農事講習所に於ける蚕糞試驗桑園

になるものでないから、多量の泥土を桑と共に食せしむれば蠶體の色が泥色となりて、幾分衰弱を來たします、蠶を衰弱させしむる事は、其他の發病に乘じて病原體が侵入したならば、忽ち發病するのである、故に多量の泥土が附着して居る葉は、是非共之を洗ひ去りして與へなければならぬ若し少量の泥土なれば其儘與へて差閊へない、但只洗滌する手數を省く事ができなく、洗滌の際に桑葉を損傷する際を免るゝ利益があります。

序に茲で一言して置きたいことは、畑に接近して至る桑を蠶に與ふれば必ず被害することであります、此事は古くより知られて居る事柄であるが、近來夏秋蠶飼育の普及するに隨ふて、世間に入繭數なつて來た機です、故に此と伴に就ても其筋に於ても、目下夫々試驗に着手せられて居る、又友人坪井磨作氏は、夙に畑蟬の毒に就て試驗せられ、其結果は明治三十九年東京蠶業講習所蠶事報告第二十七號に掲載せられてある、兎に角近來の及ぶ厚壞や其他に就ても、一層詳細なる報告に接するであろうと思ふが、從來の實驗や近に發表せられて居る試驗成蹟で畑蟬に近接せし桑が蠶を害することは、毛頭疑ひを容るゝの餘地はない、而して害の淺きものは

被害後數時間を經過すれば恢復するけれ共害の甚しきものは遂に斃るのであります、且一旦被害したる蠶は、緩慢恢復しても爲に大に衰弱しますから、稼後は無事に發育することは覺束ない、五齡以前の蠶なれば眠期に於て遲蠶となり或は病、到底無害の蠶の如くなれば幸に結繭しても薄皮繭を結び、又五齡期の蠶と比較は出來ぬ要する秋蠶飼育者と、畑草栽培者とは甚だ折れ合ひが悪い事情であります。

然れ共畑草の實驗する處では、畑草の葉が未だ綠色を呈して成熟しない間は害がないと云へてよい、然るに畑草が小さくとも既に成熟して、葉が黃色を呈する樣になると害が甚しく且つ遠方迄も害を及ぼすのであります、畑地の形勢や其地方の風向や其他の關係は、害を及ぼす距離は一樣ではないが、畑草の反別が多いときは、三拾間位を距てゝも被害することは稀ではない、故に畑草と桑とは、成るべく遠く距てゝ栽培すること、畑草畑と近接して在る桑は成るべく畑草の成熟する前に摘採することに注意すれば、害を輕減することが出來ます。（未完）

言葉花咲くものは
心必ず實なし

新井白蛾

日本蠶絲界の典型

波多野鶴吉君

聞說く大なる人格はよく小なる人格を同化すゝ、詳にして就ならば偏者の発筆を振つて客談本樹に縛りしたる際大なる人格が同化したるべき、偉大にして特色ある各個の人格は無に帰して如何なる特色の小人を同化し去りたるべき、偏者の不敏なる不幸にして之れを知らず、蠶絲界の人格が之れにより代表的向上の結果を實にしたる結に、深く感謝を満めて今より訓出する教育界及に虎中に於ける不幾の蠶史に、より多くの結果を齎さんことを。

いふべからざる遊蕩兒

時は明治九年、京都は花の島原や、絳を聚めし祇園の月に酔歩散漫として吹く風に微薫を吐き行く少年あり、紅顏春色を含むと雖も明眸の犯すべからざる、之れ遂に尋常の遊野郎にあらざるを思はしむるもの、之れ實に今日關西製絲界の獅子兒西日本蠶絲界の典型たる波多野鶴吉君の前身ならんとは、乞ふ測りて之れ說かしめよ。

君は安政四年京都府何鹿郡中筋村に生れ父を羽室嘉右衛門といふ、君は實に其の第二子たり。後九歳に及び出て從妹に配せられて絶えんとする波多野氏を嗣ぐ、波多野家は君が母の生家にして同上林村にあり、資產羽室家の比儔にあらずと雖も尙村内有數の資產家にして德望亦なか〳〵に厚かりき。當時尙學校の設けなく、君亦出て、教を受くるに由なかりしかば藩主の家老山室仁左右衛門氏の門に遊びて書生となり日夜師に侍して門を出でず、後師の卒去に遭ふや啼泣之を久しうして同郡以久田村の鄕學校に寄宿し更に步武を新にして大に研鑽の巧を積まんとせり。然れども之れ明治元年の事にして敎育法の不完全なる殆ど言語に絶するものあるに加へて綾部藩は朱子學を以つて其の風と爲せるが故に其の敎ふるところは只修身、正行の二にして他に及ばす、而かも日夜孜々として倦まず、且に道を聽いて夕に之れを行ふこと前後五年令聞漸く高からんとせるに藩は廢せられて學校制度定り新に中學校と師範學校の設立を見るに至りてより、又之に移り實家より通學せり。當時の敎育組織は之れを今日より觀れば頗る滑稽に類すること多く、學科の如きは生徒の志望に任せて一科を專攻

長野縣去澤製絲場に入り勤續すること二十有八年品行方正技術優等の故を以て本會第一回總會に於て松平會頭より賞品及賞狀の授與を受けたり

市瀬まさ子

せしめたるなりき。君の學校も亦句讀師、算道師、算術師等を置きて之れを行ひしかば性數學を好める君いかでか躊躇すべき、乃ち算術の敎師たらんことを欲し直ちに算術師につきて專心數學を究むること夙夜怠らず、既にして明治も七歲を計へ君十七歲の春酣なる時、孤影飄然として笈を京都に負ひ、學を今の京都第一中學の前身たる京都中學算術局に修す、在ること一年にして開平、開立及代數の一斑を學びたりと雖も當時未だ邦語を以つて編述せられたる數學書は極めて寥々たるものにして代數以上に至りては之れを原書に求むる外一もあることなかりしより劇に英語を修むるの急を感じ先づ之れを學ばんと試みたるも京都の地未だ英語を敎ふるの人なく、君が志も空しく之れが爲めに阻めらるゝに至れり、然るに天慈か君幸か、大阪の知人君の志を聞いて痛惜の情に堪へず、乃ち書をものして君を文部省の大阪英語學校敎官檜林健三郎氏に介す、君欣躍措く能はず蒼惶行李を收めて翌八年の秋風に薄き衣を飜へしつゝよし葦しげき大阪に下り、英語に心を潛むると紀餘、既にして代數學の如き原書を讀み得るに至りしが或時檜林氏君に謂て曰く

君の數學に堪能なる壯者も及ばず希くは餘暇を利して熟生に之れを傳へよと、之れ固より君の望むところ、快諾之れより又大に數學に志し同校の敎師中島利吉氏及造幣寮の數學敎師小田信之氏につき放課後常日に敎を受けぬ、九年の春、檜林氏の東京に轉任するに及びて英語學校は閉ぢて復開かず、君茲に一歲の舊情を釋て故鄕の人となり再び京都中學に學べり。然れども一歲の出遊は君を擧げて同校算術局敎場補助となししが故に大に研究の便を得、傍ら其授業を助くるに至りしと雖も、當時恰かも府縣師範學校の創設せらるるに際せしかば其の多忙なる殆ど君が研究を許さず、空しく學窓の裡に忙殺せらるゝに至れり。時に惡友ありて會々君を祇園に拉し一夜の春に醉はしめぬ。色即是空と觀ずる大哲と雖も一度紅花の巷に入りては凡夫と化するを況や青春の情を抑へて義に難波に出て歸へりて學窓に忙殺せられたる君をや、饑ゑたる虎は食を選ばずとの譬の如く峻嚴學を修め、大志なすところあらんとせし君は今や其の反動として情火頻りに燃えて理性爲めに悉く燒盡きたるが、俠斜の風、巫山の夢は劇に醒めず、日夜祇園、島原に遊びて艶調、粹語に醉ひ紅燈の下綠酒を酌んで全く絃歌の人となり了んぬ。而かも歲月水の如く流れて君未だ醒めず、學眼中になく大志胸中になく、渾身只之れ紅影粉黛の夢想郷！あゝ之れ後に關西製絲界の獅子兒たるべき吾本邦蠶業界の典型として萬人の崇仰を受くべき人の活歷史か、描き來れば之れ眞にいふべからざる遊蕩兒！。

兵庫縣日下製絲場に入り勤續すること二十有一年品行方正技術優等の故を以て本會第二回總會に於て松平會頭より賞品及賞狀の授與を受けたり

居和みつ子

窮れる哉紈袴の子

玉山幾度か綠盃の間に崩れて春風、秋雨前後四星霜、親を僞り兄弟を賣つて而かも尙醒めず、養家の財產は早く既に蕩盡して不義の借財は積んで山をなし曉將項羽今や四面楚歌の中に落魄の秋を味ふに至りぬ。窮れるかな紈袴の子、無緣の堂には倚るべからずして孤影悄然遂に再び養家の人と在りぬ。時に曉鴉暮林に鳴いて萬象聲を潛むる十四年の秋なりき、七年の間を孤閨の淋しさに泣きたりし妻、君が落魄の姿を面當りに見ては弱き心の果して如何なりし、閨怨積て十年情に代へて泣ける淚は此瞬間に於いて始

めて内助の寵として、暖き心を君に捧げたるなり、歸へりて見れば幾年の游蕩に何の得るところなく年齢徒らに多きを加へて既に二十四を數へ一度身を立てんと誓ひたる數學も今は人後に落ちて又起すべからず、過ぎにし後をみかへれば悔恨の涙溢れて、漸愧いふべからず、勵み九腸を寸斷して善後の策に心を碎くのみ、而かも一家親戚事を運ぶと雖ども、我が赤心を貫めず、愛妻赤心を感じて、君が心神を感動して感ぜざるより固よりを合にして敏なる君其德の深きにつけて自己の罪に恥じ大に懺悔の實を擧じるに力めたり。然れども潮落の秋至りては南風復の實を擧げんとするものなきよも亦勢ふに由なく、自ら進んで君を用ひんとするものなきよりして此の月手當五圓、身は之を村内唯一の豪家に生れて行住坐臥只心の行く儘なりを今此の薄給を食むて唯々として密かに授業生たらんとを願ひる者あり、君固より授業生たる數域に立つ、嗚呼當初の大志に比して何等の落魄ぞ、トして君の資格なし一助ともなれと寒心敬慎を振ふことなかれ。而用懺復の一助ともなれと寒心敬慎を振ふことなかれ。

林子平

蘭は幽々如て手前勝手な咲きゝ事なり

桑樹凍傷に就ての質問

山形縣 過常會員 今野今朝吉

晩近桑樹生産の密植即成桑園が大に流行し、子も亦同感であつたから大に嬉勵しましたが、當地は東北地の最西の位置で日本海に接し降雪最多く尠くも五尺を越へ、桑樹栽培の如きも頗る困難である、四五年前より桑樹生を試植せしに翌春雪消に際して、悉く凍死するので、蕪杉葉麻等に代り包みたるも寸効なく、又刈取りの如きも地上一尺内外の所より伐採せるものと、地際より刈採るものと二區に別け、前者は幾分か枯死が尠い樣であつて、肥料を多量に與ふる丈け枯る、數を増樣でありました、其の狀態は四月下旬雪の消えたる頃、桑園を巡回して檢するに桑株の諸所に黑點を生じ、遂々鑽がりて遂に全枝に渉り同時に表皮脱剥して褐色となり一見湯煮にしたやうの觀を呈するのです、以上の如き

降雪多き地に於て桑桑實生を完全に培養する法あらば御高教を願ひます。

答

學藝委員 農學士 須田金之助

桑桑實生の枯易きとは一般の説である、又實際である余が山形縣の栃岡にて調査せる所に由ると、地上一尺乃至一尺五寸位の所より刈取りたるものは、桑株も大きく強壯となりて枯死すること比較的少なきとの實説の如くである、北海道の如き寒國にても桑桑の實生を一兩年前より栽培せるが、多くは根刈となせるも全部枯死するが如きことはない、多くは先枯れてある、是れは秋期遲く生長したるもので組織強固なるが故に其枯死するも根株は決して枯死せず秋蠶に用うる爲めなれば差支ないのである、又施肥量多きとき枯死するは必ず地中に多量に肥料の蓄積する爲め桑は遲く生長する爲めである、又遲く施肥するも宜敷ない、桑枝を地中若くは雪の下に曲げて埋没せば枯死するのを防ぎ得る、之は北海道にても行ひ又越後高田地方にて見る所である、又株の根元湯煮せる如くなるは積雪の多い地方又は年々屋々見る所で、之は春季融解せる雪水が根元に停滯せるより自然腐蝕するものであるから、之を防ぐには地中の排水を便にし、著くは春季際の雪を速に消えしむる樣にせは宜敷からん、左れども桑株の諸所に黑點を生ずとあるが、之れは「バクテリア」の作用なるが如きも實物に由らざれば明かでない。

蠶室蠶具の設備其他に就ての質問

静岡縣 過常會員 和泉德太郎

(一)蟻量弗拾五匁を掃き立つべき準備として左の如く用意して如何てせう過不足あらば御教示を願ひます。

(1) 蠶室　高床上ゲ天井拾尺の拾尺、八桑室三、六桑室三、但天井には三尺に四尺の排氣窓各一宝に一個ゾ有し事務室及上蔟室共
(2) 貯桑室　間口三間、奥行二間、土蔵二ケ
(3) 貯桑籠　一ケ四五メ入　二十六個
(4) 蠶台　一尺八寸二尺八寸のもの四百枚、二尺三尺のもの百枚、二尺五寸三尺五寸のもの百枚、計六百枚
(5) 蠶棚　一分九寸五枚、二分二百枚、四分五百枚、計七百九十五枚
(6) 笊　但給桑用大三個、小三個
(7) 桑取入籠　一個四五貫匁入位のもの四ケ
(8) 笹簾　拾貳個六組
(9) 乾燥計　七本
(10) 桑鋏　一組六個のもの貳組
(11) 鋏　貳個
(12) 桑切盤　貳丁
(13) 桑切盤　大小貳丁
(14) 桑切鋏　貳丁
(15) 箒　拾揃
(16) 羽箒　拾本
(17) 琺球ヂヤ　五枚
(18) カルトン蠶鉢上蔟用　貳個
(19) 天秤　二十メ一本、一メ二百目一本
(20) 南蠶收容器　三個
(21) 消毒用噴霧器　一個
(22) 撚鋏　二千八百本
(23) 粗鋏　拾貳石

(二)在來の爐（即ち坏下に埋火するもの）と養蠶用暖爐（九山含製）とに定の溫度を保だしむる上に於て何れが經濟て

せう。

(三)蟻量 貳拾五匁を掃き立つべき人夫の總數及各齡別人夫數

各齡別桑取人夫と飼人夫との比較如何で(但飼育法度七十度より七十五度の目的)三十五日位にて上族の育法にて

(四)實生魯桑一反歩に付二千五百本位植付の桑園一町歩にて掃立より上族迄收葉(上族迄收葉)大凡蟻量何匁を掃き下

全(但二三齡共)

すことが出來るでせう。

但五齡期收葉一反に付春蠶期百貫のもの。

(五)私は例年收葉標準表なるものを製し使用して居りますが此表は西宇原春蠶標準表の一日の量に三割を加へ之を一日分の收桑總量とし、是により雨天續様であるときは二日分若くは三日分等適宜取又の便に供して居り、抑世界數の士に対して是等に付調査せしものがありましたなら業量と蠶量との割合(野蚕と作蚕)各齡別に御教示下されたい。

答　土屋泰

學藝委員

(一)飼育室は蟻量四匁に對し少くとも八疊敷一室を要する上族の際は尚多少の補助室を備ひねばならぬ。貯桑室は充分であらうが、調桑場として、八疊乃至拾疊を要する。蠶箔は面積より云へば略適當なれども實間書記載の如く大小各種を用ふるは不便であり、成るべくは巾二尺五寸長三尺五寸の一種とし三百七八拾枚を用意せねばならぬ。

蔟は箔に相當せる大さのものにして箔數の二倍を要する、除砂網は記載の如き網目のものは適宜設備するも良し

五齡用除砂網は蔟と同數に設備するを要するが、右の外族用の蠶又は蔟約二百枚を要し、収繭は蟻量一匁に付約一石外に翌繭又は親繭の細碎せるもの約一斗を準備せねばならぬ。

此他雑具は從業者の數と蠶室の設備如何に依り異なるを以て一定の標準を示し難い。

(二)相當の爐を設備し得る室に於ては爐に依る方、補温其他に便にして且經濟ならんと思ふ、但し精密に比較試驗を行ふことが出來ない。

(三)蟻量四匁の蠶を掃立收繭迄に要する人夫は概ね三十五人乃至四十人を要するけれども、各齡別に摘桑と飼育とに要する人夫を區別し難い、何となれば桑園と蠶室との距離の遠近桑樹の繁茂の良否等に依りて甚しき差異があるからである。

(四)蟻量は約五六匁であらう。

(五)蚕業の制合は桑の種類と其年の氣候如何とに由り大差があるが、一昨三十七年に於て早生種は市平多菊早生中生種は鶴田晩生種は十文字等に就て調査せる成績は左の如くである、但し桑樹は總て根刈式である。

	葉量	蠶量
早生種	六一、五	三八、五
中生種	六五、一	三四、九
晩生種	七〇、〇	三〇、〇
一齡	六九、六	三〇、四
二齡	六九、一	三〇、九
三齡		
四齡		
五齡		

野桑に就て調査せる成績あるを知らず

春蠶種の風穴貯藏に就ての質問

埼玉縣 通常會員　谷島茂三郎

一化性春蠶種を初めて風穴に貯藏し、翌年七月之を取出して秋期に飼育したならば、從來の風穴種と比較して其蠶兒の強弱は如何でせう、又前記春蠶種の風穴に貯藏したるは如何なる結果を生ずるでありませうか。

答　八田達也

學藝委員

春蠶種を初めて風穴に貯藏し翌年七月頃出穴する時は概して發育が不良であつて、蠶兒は幾分虚弱に陥り、之を普通の風穴秋蠶種に較べると、飼育困難に減蠶の歩合も著しく多い、蚕し貯藏時期の長きに亘れると、酷熱なる氣候に馴れざる爲めであらう、前の品位は比較的優良であるが、收繭は著しく減少するのである。

軟化病蠶に就ての質問

岐阜縣 通常會員　小原鶴次郎

(一)秋蠶五齡期(昨年八月十五日)二日頃より肛門に水分を帶び糞粒を附着し遂に下痢し、指を以て下腹部を壓するときは二三糞迸出して一時に出て(三蠶共黒色なり)全體次第に半透明に至りて斃死したが、輕症にして透明にならざるものも上蔟後更に結繭しませんでした。

答　林驊作

農學士

一、軟化病とは本病を總するに一種の軟化病に罹りしものである、此病は其原因種々の事項に關係を有する故、果して何れが主なる原因なりしやは明かならざるも、蠶種の良否は第一の原因である、次は給桑の不適當なることで、蠶座が過乾又は過濕のため、食桑が充分でなかりしことによる、殊に過乾の場合には此病を發し易きものである、元來此病は「バクテリア」が蠶兒の消食管内に繁殖することにより起るもので蠶種が不良なる爲め、生來虚弱なる蠶兒若くは温度が不適當にして食桑不良なるものに於て發する病なる故此等の原因なりしやは明かならざるも、蠶種の良否は第一の原因である、次は給桑の不適當なることで、蠶座が過乾又は過濕のため、食桑が充分でなかりしことによる、殊に過乾の場合には此病を發し易きものである、元來此病は「バクテリア」が蠶兒の消食管内に繁殖することにより起るもので蠶種が不良なる爲め、生來虚弱なる蠶兒若くは温度が不適當にして食桑不良なるものに於て發する病なる故此等

問　答

の諸點に注意すれば之を防せぐことを得るのである。

二、雛蠶期には無肥料桑の方却て肥料桑よりは成分の割合が良好であるから、之を以て飼育する蠶兒の成績が可良であるが、併し肥料桑を雛蠶に給して特別の蠶病を發生すると云ふことはない、唯だ不眠蠶だの起繭だの普通に生ずる病蠶の數が幾分か多いと云ふに過ぎぬのである。

微粒子に就ての質問

和歌山縣　藤原久太郎
通常會員

微粒子病に罹りたる蠶の母蛾より產生したる卵殼所には決して微粒子は存在しない、只其卵殼外に微粒子の附着するのみである、卵の顯微鏡檢査の如きも、卵殼內に微粒子の寄生したのを檢査するものではない、只卵殼外に附着した微粒子を檢査する爲めである、而うして微粒子病に罹りたる母蛾の產出したる卵を能く洗滌して鏡檢するときは、決して微粒子を認めない、之れは卵殼內に微粒子の存在せない證である、最も微粒子の寄生を受けたる母蛾は、其卵に體質の遺傳（即ち虛弱性）せないものである甲者は、誠に居る。

又乙者は微粒子は傳染性と遺傳性とを有する者で、微粒子の寄生したる母蛾の產出したる卵殼內にも微粒子の存在するとが有る、而して微粒子が母蛾の生殖器內に寄生したる場合は其蟄殼を構成する時は、卵殼細胞の核に寄生したる場合は細胞核には分裂するとが出來ないで死するものであると乙者は說いて居る。

右二說の內孰れが是か非か又母蛾より卵に傳はる微粒子の經路を御敎授下されたい。

答

學士會員　石渡繁胤

微粒子の卵內に寄生する順序は原卵細胞內に微粒子の侵入するものあり、其卵を構成するあたり、卵內に包含するに至るもある、又搾間に微粒子の卵殼のみに附着し、卵殼內に微粒子のなきこともある、寄生物核內に入りて核の作用を失はしむることあるは勿論である。

伊太利萬國博覽會

在ウエニス府產業國際設會の五十箇年記念祭に際し墨馬府及トリノ府に於て萬國博覽會を開くの計畫あり特に「トリノ」府の分は工藝全體の部類に涉へく既に委員を任命せられ必要なる資金四百萬（「リラ」の內百五十萬（「リラ」は既に寫集せられたりと云ふ（時事八月二十二日發刊萬國商業博物館國報）

資料

千九百六年度世界重要產絲國產絲額統計（其二）

（佛國の積）

收繭額　農務省の公表した統計表に依ると千九百六年度に於て佛國の收繭したる額は七百五十二萬〇四百七十七瓩にして千九百五年度の夫れは八百萬〇〇九千三百九十八瓩であつた。

最近十年間に於ける收繭額を擧ぐれば左の如くである。

年次	收繭額
一八九六	九三一八七六五
一八九七	七七六〇一三二
一八九八	六八九三〇三三
一八九九	六八九九三三三
一九〇〇	九一八〇四〇四
一九〇一	八四五一八三九
一九〇二	七二八七五四一
一九〇三	五九八五四八一
一九〇四	七八二五四八五
一九〇五	八〇〇九三九八

十年間平均額　七七七〇五四一

故に千九百六年度の收繭不足額は之れを千九百五年度に比すれば四十八萬八千九百二十一瓩（六割一分減）にして、之れを十年間平均額に比すると二十五萬〇〇六十四瓩（三割二分二厘減）である。

各縣共に收繭不足の中間入りをしたが、其內最も減收を見たの縣は「ガール」縣の二十二萬二千〇四十四瓩「アルデーシユ」縣の十二萬二千三百七十二瓩「ドローム」縣の三萬二千八百八十八瓩「ヴォークリューズ」縣の二萬九千百九十七瓩である。

「ガール」縣と「アルデーシユ」縣とが斯くの如く大減收したる原因は此の二縣の桑樹が三月の霜害と四月の氣候不順とのため發育を妨害されたるに在るのだ。

又最近十年間の收繭額を蠶種別すると左の通りである。但し瓩單位である。

年次	佛國蠶種	日本蠶種 原蠶種	日本蠶種 復蠶種	支那蠶種 原蠶種	支那蠶種 復蠶種	其他の外國蠶種	合計
一八九七	七七六〇一三二	四六六五五	一四一八四	—	—	六六〇	七七七〇五四一
一八九八	六六四四六六	四〇一五五	一六五六	—	—	六六四四	六六四四六六
一八九九	六六四四六六	一八六六	一四六六	—	—	六六四四	六六四四六六
一九〇〇	九一八〇四〇四	一四九六	一六六六	一四六六	一四六六	六六四四	九一八〇四〇四
一九〇一	八四五一八三九	一六六四	一六七四	一四六六	一四六六	六六四四	八四五一八三九

千九百六年度世界重要產絲國產絲額統計

千九百六年度世界重要產絲國產絲額統計

一九〇二	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
一九〇三	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
一九〇四	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
一九〇五	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
一九〇六	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

大日本蠶絲會富山支會に於て設けられたる機織桑園

の收繭量であつて、二「オンス」には四十二基乃至四十三基を要した。

昇降した。

製種用として過し置いた蠶繭と收獲したる蠶種の量

製種用

一「オンス」の平均收繭額は前年度に比して大差なしであつた、即ち前年度の四十二基三一に對し、千九百六年度は四十二基一七であつた。

蠶種の佛國輸出

那蠶種の佛國輸出すると支の收繭を得た、即ち二、付四十四基五二であつた、佛國蠶種は、最近三年間殆ど同一

製種用

蠶種の量

製種用

蠶種一「オンス」の平均收繭額

蠶種

一「オンス」の平均收繭額は前年度に比して大差なしであつた、即ち前年度の四十二基三一に對し、千九百六年度は四十二基一七であつた。

一九〇一年度　四五〇〇〇〇
一九〇二年度　四三〇〇〇〇
一九〇三年度　四一〇〇〇〇
一九〇四年度　四〇〇〇〇
一九〇五年度　四一五〇〇〇

收獲したる蠶種の量は稅關の統計で明瞭する、夫れは左の通りである。

外國輸出した蠶種（風袋共）　六三七〇〇
輸入　二一〇〇
差引　殘　六一六〇〇
內風袋六割を差引　三六、九六〇
差引（正味）　二四、六四〇

即ち此の數を二十五「グラム」の二「オンス」に引き直すと九十八萬六千「オンス」となる、此の九十八萬六千「オンス」に佛國に於て拵立てた十七萬八千「オンス」を加ふると百十六萬四千「オンス」となる、之れが千九百六年度に於ける佛國の蠶種產出額である。

一「釜の製絲額と生絲產出額

飼育中の氣候が概して順境であつたのと、飼育最終期が特に良好なる狀態を呈したので一釜の製絲額は前數年間の平均より多量であつた、即ち概しとして取り除け置いた蠶繭の量は何等公表された書類がないから遺憾ながら不分明である、けれど、屑物として賣買された出殼繭の分量を以て製種用として取り除け置いた蠶繭の量と見れば蓋し大なる過誤なしであらう、其量は千九百六年度に於て四十萬基であつた、最近五年間の此の分量を序に左に紹介しやう。

て云ふと佛國黃繭種と支那產種とは十一基半內至十二基、綠繭種は十二基乃至十二基半であつた。

千九百六年度の生絲產出額は左の如くである。

黃繭種（佛國產種）		七、二三三、九〇五	
同　上（外國產種）		一九、六九一	
白繭種（支那原種及寫製種）		七、三五三、〇〇〇	
合　計		四〇〇〇〇〇	
製種用として取除たる黃繭種		六、九五三、〇〇〇	
製絲用黃繭種		一、二八、三二三	
日本原絲繭種		一六七、四二七	
日本產絲製絲繭種		一五八、三二三	
合　計		一、九〇四、四一四	

繭の代價

最近三年間に於ける最上黃繭の平均代價は左表の如くである。

都名	一九〇四年	一九〇五年	一九〇六年
アルデーシュ	二、九〇一—二、九五	三、五五—三、六五	三、五〇—三、六〇
ドローム	二、六〇一—二、七〇	三、一一—三、二五	三、五〇—三、六〇
ヴォクリュース	二、五五—二、六五	三、一〇—三、三〇	三、四五—三、五〇

蠶絲業者の數

蠶絲業者の數は千九百五年度に比して千七百十六名を減じた、即ち千九百六年度は十二萬二千〇四十五名に過ぎ、又最近十年間の蠶絲業者の數を左に列記しやう。

一八九六	一四五、三一〇
一八九八	一三三、二八八
一九〇〇	一三六、二一四
一九〇二	一二、二八、二九
一九〇四	一二、二五、二四四
十年間平均	一二、九、六三四
一八九七	一八九七
一八九九	一八、一一四
一九〇一	一九〇一
一九〇三	一九〇三
一九〇五	一九〇五
一八九七	一三三、二五三
一八、一一四	一三二、六九四
一九〇一	一二〇、二六六
一九〇三	一二〇、七六一

（佛國の項完了）

絲況

横濱市場

十二月中に於ける横濱生絲市場の光景は、其形勢日々に非にして月初の絲價騰に八百圓臺に墮落せんとするの狀態なりしも、五日原輸出濠に二萬斤許りの買氣ありと傳へられたるもの遂なく回復の動機となり、久しく翼を收めて市場の實行を眺め居たる外商及直輸筋一齊に買進みたるより、不振に不振を重ねたる市場に漸く活氣を添へ、七日の絲價信州上一番格九百三十圓を底直として十日には九百四十圓となり、翌十一日には一躍九百八十圓となりて將に一千圓の呼聲を聞かんとするの概ありしも、其後賣濫りと買控へとは相待て再び市場の鎭靜を招き兎角捗々しき手合なかりしが、クリマス前後より弗々生絲初商の商談開始せられ、三十日には細太及虎繰等相應に商談整ひ、三十一日には朝來一層の景氣を添へて、貳千五百個の初手合を見たり、然れども相場は依然引立たず上一番九百四十圓虎繰二人娘九百六十五圓前後に取引せられ、在荷四萬五千個ム稀有の大停滯を以て越年するの止を得ざるに至れり。

而して客月中に於て最も高價に賣行きたるは愛知縣信用社

細の千百拾五圓にして、最も低價なりしは長野縣光信館太の九百廿五圓なりとす、今一月以降の最高價と前年の夫れと對照すれば左の如し。

生絲最高價月別前年對照表

	明治四十年			明治三十九年			價格之差
一月	山梨縣	矢島組金太	一、三一五圓	愛媛縣	河野製絲太	一、〇九〇圓	二二五圓
二月	山梨縣	矢島組金太	一、三〇〇	神奈川縣	兄弟社細	一、〇九〇	二一〇
三月	岐阜縣	金森製絲細	一、四〇〇	山梨縣	風間製絲太	一、一二〇	二八〇
四月	東京府	羽村館	一、四五〇	山梨縣・埼玉縣	風間製絲太・埼玉製絲太	一、一二〇	三三〇
五月	群馬縣	交水社旭鶴座	一、四三〇	愛知縣	國寶社細	一、〇八〇	三五〇
六月	山梨縣	矢島組金新太	一、三一〇	愛知縣	國寶社新細	一、一〇〇	二一〇
七月	埼玉縣	森澤製絲細	一、四一五	愛知縣	國寶社細	一、〇八〇	三三五
八月	埼玉縣	森澤製絲細	一、四五〇	山梨縣	矢島組太	一、〇九七	三五三
九月	靜岡縣	城南社細	一、四七〇	靜岡縣	川津製絲・城南社細	一、一一五	三五五
十月	山梨縣・埼玉縣	甲南社細・森澤製絲細	一、四六五	山梨縣	矢島組太	一、一五〇	三一五
十一月	靜岡縣	城南社細	一、三〇五	靜岡縣	橫須賀社太	一、二三〇	七五
十二月	愛知縣	信榮社細	一、一一五	山梨縣	矢島組太	一、三一五	二〇〇

明治四十年十二月自一日至三十一日生絲集散表

	持越	入荷	賣了	地方徒戻	繰越
器械	二九、六二三	一五、四〇四	九、二二八	二、六七二	三三、一二六
座繰	八、七九八	一、九五三	九六〇半	一三九半	九、六五二半
折返	二、一八九	一三六	一五四	七二	二、〇九九
雜絲	一一七	一四	—	—	一三一
合計	四〇、七二七	一七、五〇七	一〇、三四二半	二、八八三半	四五、〇〇八

備考

一、表中單位個は九貫目を指す

二、持越とは客月より本月に持越したるものにして本月一日の調査繰越とは本月より翌月に繰越すべきものにして本月末日の調査に係る

三、前月分の繰越と本月分の持越と其數一致せざるは商談中のものありしに係る

四、繰越以外に商談中のものありと知るべし

五、賣了中米國に輸出せるものは三千七百六十八俵にして歐洲に輸出せるものは一千六百十五俵なりとす

尚左に生絲集散日別表を掲げて參考となさん

明治四十年十二月自一日至三十一日生絲集散日別表

器械太□ 同中△ 同細○ 座繰× 折返+

日次	入荷（個）	手合（個）	賣了（個）	引戻（個）	輸出（個）	地方返戻（個）	國名	社名	種別	最高價格	摘要
一日											日曜日
二日	一、四六九	二四二	二九七	—	—	二八五		未定			前注文口へ上州南部座繰の手合有たれど其他は染たる商談なく捗々しからざる成行なりし
三日	六四二	七二	二七三	—	一〇〇	六〇半		未定			定期は先物中物とも遂に九ト圓臺を破り現物は目星き商談なく日に増面白からざる狀勢なりき
四日	五七六	三八	九二	四五	七五四	一五〇	信濃	東行社	○	一、〇〇〇	引續き不人氣にして新規商談皆無の姿なりし
五日	四二三	—	二六一	—	—	四一半		未定			新規にはあられど、少しく信州上一番格に商談を進め居たる向きありて成否未定なるが直段は九百拾圓位の見當なり
六日	六六八	二二八	四〇一	—	—	四〇		未定			信州上一番格九百貳拾圓迄買進みたる向ありしが定期市場の足並高く氣構へてか賣應ずるものなく結局不折合に終りたり
七日	四七一半	四九八	二四三	九	—	五四		未定			前日來煉り居たる商談只漸く九百參拾圓に折合たるが中には直段進まずして一時手を退きたる向もあり
八日	—	—	—	—	—	—					日曜日
九日	一、〇三五	五二二	六三九	—	—	一一五	三河・信濃	國寶社・俊明社	○・□	一、〇七〇・九三〇	兩三館へ前注文口手合出來せしが直段休日前と變りなかりし
十日	八五九	二六六	七一二半	三六	—	九三半	甲斐・信濃	甲南社・常田館	○・□	一、〇七〇・九三〇	歐洲向は續いて手合出來し必要口は五圓乃至拾圓高は買進む向ありし
十一日	三九〇	二三九	四〇〇半	—	四〇八	二〇四	信濃・同	渡邊製絲・日本社組	□・□	九三〇・九二五	細筋物は弗々小堅く太筋物も一二買含みあれど定期市場暴騰し結局四拾圓高を以て賣行けり
十二日	六八九	四四六	五四五半	八三	—	一一一	三河・信濃	國寶社・清澤製絲	○・□	一、〇九〇・九二五	一兩館買氣ありて上州座繰其他の手合出來し氣配は保合の姿なりし
十三日	六〇八	一三四	六九〇	一四一	—	一一二	武藏・信濃	上水社・岡谷製絲	○・□	一、〇八〇・九三〇	歐洲向の細筋の手合ありたるのみにて一兩日前に比し氣配靜かなりし
十四日	三九一	一五六	六七九	—	五二七	一一七半	駿河・信濃	岩淵製絲・鷲上社	○・□	一、〇九〇・九三〇	注文頓と來らず相互に白眼合ながら氣重し
十五日	—	—	—	—	—	—					日曜日
十六日	一、六〇〇	三六	五一二	七八	—	四九	遠江・信濃	平岩製絲・日本社	○・□	一、〇六〇・九八〇	細筋物に少しく手合ありたるのみ來向は染たる商談なく不振の商狀なりし
十七日	四四六	一九六	四九九半	—	二〇一	六二	甲州・上野	矢島組金頬・碓氷社五人	□・×	一、〇七〇・一、〇二〇	前報同樣更に變りなかりし
十八日	五三八	四二〇	四八〇半	六	一、〇九〇	一〇〇	三河・信濃	東郷館・中野館	○・□	一、一〇〇・九九〇	直輸筋其他前注文口へ向て上一番格出來せしが相場は前直より貳拾圓安にて捗々しからざる成行なりし
十九日	五八七	二八五	四七七半	—	—	八七	信濃・同	中伊那社・岡谷社	○・□	一、〇三〇・九六〇	一兩館買氣を續け居り直段變りなく底意稍含の成行なりし

二十日	五二三	一三九	四二三	一〇五	—	一〇一	武蔵 信濃	上水社 東英社	□○	一、〇八五 九六〇	各館染たる買氣なく氣配益々不味の成行なりし
廿一日	七五〇	一五一	三七一	七二	三一九	三三	甲斐 信濃	廣盛社 日本社	□□	一、〇八〇 九六〇	引續き碌々商談なく直段信州上一番前直より貳拾圓安なりし
廿二日	—	—	—	—	—	—					
廿三日	九三六半	二〇〇	六三八	七六	—	九三	武蔵 信濃	日新館 東英社	□□	一、〇〇〇 九六〇	歐洲向中太及細繊物に弗々手合ありしに過ぎず氣配穩へて面白からざりし
廿四日	四七〇半	三八一	五一六	一八	三七九	—	飛騨 信濃	旭社 平林組	□○	一、〇八〇 九四〇	三井物産其他當用口へ手合出來し直段先づ以て穩りなかりし
廿五日	六二八	—	二七四半	一八	—	七六	信濃 同	牧製絲 信龍館	□○	一、〇〇〇 九五五	「クリマス」にて各館揃れ休業し數口の納まり發表ありしのみ生絲會社其他手合出來し相場は保合ひなりし
廿六日	四四九	二一八	四七八	一九一	一、一三七	一五五半	三河 信濃	信要社 光進館	□○	一、一一五 九二五	定期市場は高直を以て納會を告け現物は引續き靜かにて頗と手合を見ざりし
廿七日	七五六	—	一四四	—	—	一九〇		未定			初手合商議弗々見受けられたれど捗々しからざりし
廿八日	六〇五半	—	二九六	—	三九四	二四七		未定			
廿九日	—	—	—	—	—	—					日曜日
三十日	九九六	—	—	—	—	三〇六					
卅一日	—	—	—	—	七四	—					
合計	一、七五〇七	四、八六七	一〇、三四二半	八七八	五、三八三	二、八八三半					

初手合の內譯は三井物產生絲合名會社にて米國向約二千四百個餘　其他百六十八番館外兩三館弗々ながら續品を取入れ通計三千五百個餘なりし

尙左に昨年一月以來の生絲集散の狀況を明かならしめん爲め月別表を示すべし

生絲集散前年對照表

明治四十年度の生絲貿易

我外國貿易は十數年來年々五千萬乃至一億萬圓內外の輸入超過を見たるも、一昨三十九年に於て初めて四百餘萬圓の輸出超過を現はし、今後我貿易は漸く輸出超過の時代に入るに非ざるかを思はしめたるが、昨四十年度に於ては又々六千餘萬圓の輸入超過を現はしたり、其原因は生絲羽二重等の輸出額を減じたるに反して、米、綿花、機械等の輸入を著しく增加したる爲なるが、今過去一年間に於ける生絲市場を一瞥すれば或時は一千七百圓てふ千古に見ざるの高直を現はし、或時は九百圓臺に暴落する等、昨年程波瀾多く當業者の心を苦しめたるものはあらざるべし、試に一月以降の經過を略敍せんに、三十九年十二月に千二百八十五圓迄昂進したる絲價は、年を改めたる劈頭一月に於て、相場行悩の氣味を呈し、一時多少の下押を見たるも、歐米經濟界の好況は、生絲の需用を促し、二月には既に太上一番千三百圓を唱へ、三月に入りては七八月渡新絲の先賣盛に締結せられ

年月次	持越	入荷	賣了	殘貨	繰越	輸出 數量	輸出 價額
四十年一月	一三、九六二個	一〇、一六七個	一〇、四三四半個	一、〇二〇個	一二、六七四個	六三〇、一一五斤	七、七六三、八三一圓
四十年二月	一〇、七七一	五、〇六二	九、五三九半	一、一七五半	五、一一八	六三九、四〇九	七、八九五、一二一
四十年三月	四、六〇七	七、一一〇	四、二四四半	七五〇半	六、七二三半	四一〇、四五八	五、二五三、六五一
四十年四月	六、一二八	九、六一四	五、八九〇半	四三三半	九、四一八	四九二、二四七	六、五八一、二〇七
四十年五月	八、二六九	四、五八八	三、三九四半	六〇七	八、八八二	三四五、八七七	四、五七一、七四五
四十年六月	五、二九二	八、一一四	五、八一二半	四五〇	七、一四三	四二二、七五三	五、四九二、九三八
四十年七月	六、二七五	二五、六二九	一八、四八一	四一〇	一三、〇一三半	一二〇、一五四	一二、八四五、九三八
四十年八月	一二、九七六	二六、一六三	二六、五四九	四二二半	一二、一六七半	一、五五〇、二六三	一九、五七五、〇二四
四十年九月	一〇、三九三	三一、九四六	一七、九六六	七一四	二三、六五九	一、〇三六、二八〇	一三、四三八、三七八
四十年十月	二二、五六九	三〇、五六〇	一八、六四八	六〇二半	三三、八七八半	一、二九五、七六六	一六、七四四、九九四
四十年十一月	三二、六八九	二二、四七九半	二一、五二六	二、七五三	四〇、八八九	八〇九、八四三	九、六三五、五七四
四十年十二月	四〇、七二七	一七、五〇七	一〇、三四二半	二、八八三半	四五、〇〇八	六一八、八二一	六、八二三、五一一
計		八二、一八〇半	八六、一三〇半	五二、六三八		九、二七二、六八六	一一六、四二九、四九九
三十九年同上		一六〇、九八九半	一七六、六五四半	一〇九二八五半		一〇、[illegible]八[illegible]、五六九	一一〇、四九二、四五〇

絲價は忽ちに奔騰して、橫濱定期絲千六百三十圓實物の賣買千七百圓てふ突飛の相場を顯はし、爲に取引所は一週間の立會中止を爲すの止むなきに至れり、絲價の上騰如此きは寔に喜ぶべきが如きも、市場の常として之が反動なきを保せず、殊に春蠶期に當り千四百圓以上の相場を現はすは、徒に原料を騰貴せしめ、事業の危殆を招くの虞あるを以て、當時吾人は屢々警戒する處ありしが、新絲の先約定多々増々締結せられ、五月中已に五萬梱の先賣締結せりとの風評高く、隨て製絲家は何れも其仕入を急ぎたるより、新繭相場一貫目七圓二十五錢と云ふ珍直を顯し原料の大部分は六十掛乃至六十五掛を以て取引せられたり、斯くて六月中旬には新絲相場千二百八十圓の高値を以て初手合出來し、七月に入りては稍不振の狀態にて千百五六十圓となりしも、入荷の大部分は約定口に引渡され、市場は寧ろ過品薄を感じつゝありしに、八月下旬の大洪水は入荷を杜絶せしめ、絲價再び昂進して千三百圓以上となり八月中の輸出額は實に千九百萬圓の盛況を告げたり、九月より十月中旬に至りて絲價は千二百圓より三百圓內外を往來し、絲界の前途頗

る洋々たるものありしも、茲米に於ける銅價の暴落に逐て、米國金融界の大波瀾は全世界の恐慌を惹起し、左しもに全盛を極めたる我生絲貿易も鉉大頓挫を來したるを以て十月中旬二百四五十圓なりし銅價其下旬には千百二圓となり更に十一月に入りては千圓に低落し、而かも買人なきの悲境に陥りて、米國の生絲銅及機屋の中には破綻するものさへ續出しかば、定期市場は益下値を引き、遂に十二月初旬九百圓臨の安値を示し、其中旬に於て一時幾分の活氣を添へたるも、市況は概れ錯乱なる以て經過し、遂に四萬五千梱餘の大作濟なる見るに至れり、如此きは既往十年間に於て「マッキンレイ」關稅の打擊を蒙りたる、去三十三年の末の在荷を除きては他に見さるの現象なりとす、今坐考の爲に其統計を示せば左の如し。

	在荷		在荷
三十年末	一二、五九九㎏	廿五年末	二四、五一一㎏
廿一年末	一九、二四九	廿六年末	三七、二五四
廿二年末	一六、七四八	廿七年末	一八、二二五
廿三年末	四一、〇二三	廿八年末	三二、六八六
廿四年末	二六、七七二	廿九年末	一四、五一二

夫れ如此く明治四十年の生絲市場は、悲慘なる歷史を殘したりと雖も、所業の前途必ずしも悲觀すべきにあらず、即ち昨年の如き盛況を見るや否や疑問なりと雖も、歐米經濟界の沼態に復すると共に、絲況回復の機運到來するや敢なり銅絲家宜しく內外の情勢に鑑み、愆慎の態度を持すられんことを敢て望む。

里昂市場

（四十年十一月十四日發）

米國の金融市場の恐慌は甚だ深厚にして其反響は今週に至り漸く歐洲の常市地に迄及ぶるに至れり、而して其影響は歐洲生絲の市價の如きも甚不味を現はし來りたるが、此際殊に識恐慌の不況を察しは意想生糸なり。

當地織屋の各工場の如きも右の不發氣に影響されて、米國よりの製造注文は多少共減少するに至れり、然れ共其既に入手せし銅絹注文は既分巨額に達し居れに鑑れ是れ織屋の爲には此恐慌も甚しき打擊にはあらざるやの觀あり、左れ共歐洲市場に於る生糸の需要は、更に退減の模樣なし、唯此際生糸の市價歐洲筋は少しく前氣を示したるに止れり、併し傳聞西及伊太利の二種のみは、獨り底意手堅く保ち合ひ上等の品にしてダニール十—十二十一—十三の物は六十二三法に持へ塡へ放れり。

東京の生糸は賣人多數現はれ氣配も屈き方に見ゆ、日本生糸は今週取引會無の姿にして出來直は左の二三種に過ぎざりき。

日本器機	一半	六十三より六十一法
同	九—十一	五十三—五十一法
同	十三—十五	
尙山田鎭事よりの（十二月二十三日發電）電報左の如し		

機屋は一般に原料絲の貯殆と鑄底製品の在荷も多からされは生糸需要は同復の望ある現狀なるも、其商況及相場共未た同復の模樣なし、五十七法見當

紐育市場

紐育生絲市況に付き國地駐在鈴木總領事よりの電報左の如し。

生絲市況横濱相上向きに連れ鞘か買氣遇める模樣なり。（十二月十日發電）

生絲市況前週末頃より浮ひ不振となる年內には市況回復の望なきが如し。（十二月十七日發電）

生絲市況變りなし。（十二月二十四日發電）

生絲市況變りなし。（十二月三十一日發電）

41年1月

會務錄

會務錄事

評議員會

客年十二月十三日午後三時より錦町三丁目三河屋に於て本會評議員會を開く、當日來會者及議題は左の如し。

曾根男爵	松平正直
今西眞次郎	副會頭農學博士
林鶴作	酒匂常明
尾澤琢郎	石居一郎
高橋新吉	星野長太郎
土屋泰	吉池慶正
法學博士 桑田熊藏	辻鶴太郎
	角田喜右作

議題

一、明治四十一年度豫算
二、同臨時部豫算
三、綾人機織規程
四、支會規則改正の件
五、支會會員異動及會計報告規程改正の件
六、買糸大會東北區連盟決議事項建議の件
七、功績調査委員選擧報告の件

右の內第一の明治四十一年度豫算は吉池理事の說明あり一瀉千里以て可決す、第二の臨時部豫算に移るの前に當り、會頭は本會の發展に伴ひ事務所狹隘を告げ殆と執務に不可能なるを以て、神田區錦町三丁目十八番地に一の家屋を購求せり本件は評議員會の決議を經て實行すべき筈なるも、事急に出て開會の手續を爲すの暇なかりしを以て、理事會の決議に依り執行せり、依て事後承諾を求む、臨時部豫算は主として之が經費を要求せんとするなりと述べられ、滿場異議なく通過可決せり、第三以下の問題亦可決確定し、第七は別項の如く會頭より報告せられ、午後九時散會せり。

支會規則の改正

別項記載せる評議員會にて決議したる支會規則の改正は左の如し。

第六條ニ左ノ一項ヲ挿入ス

「地方ノ狀況ニ依リ委員部副長二名以內ヲ置クコトアルヘシ、

第七條「委員部長」ノ下ニ

「及委員部副長」ノ六字ヲ挿入ス

支會々員異動及會計規程の改正

評議員會に於て決議したる支會々員異動及會計規程の改正左の如し。

第二條第一項中「金員ト同時ニ」ノ下ニ「每月五日限リ」ノ六字ヲ挿入ス

實業大會決議事項の建議

客年十月七日より九日まで三日間滋賀縣大津市に開設せる第十回京阪區實業大會に於て決議したる、蚕繭增殖奬勵費の增額の件、及同月十日より十二日に亙る三日間宮城縣仙臺市に開設せる第十回東北區實業大會に於て決議せる、國費を以て東北に女子蠶製造講習所を設立の件、國費を以て夏秋蠶講習所を東北地方に設置の件、右建議の手續本會に依頼し來りたるを以て、別項評議員會の決議を經て本會より農商務大臣へ建議したり。

功績調査委員の選擧

本會功績表彰規則に依り本年春期の總會に於て第五回功績表彰を執行せんが爲め、會頭に於て左の功績調査委員を選擧せり。

今西直次郎	八田德也		
尾澤琢郎	加賀山長四郎		
辻兼太郎			

支會職員の囑託

富山支會委員部長及商議員に交迭又は缺員あり、今回右の通囑託せられたり。

委員部長　富山　關野榮次郎　　宮崎　松島榮五郎　　下新川　佐伯龍一
商議員　波邊　彦八　　山村邦之助
福島會商議員左の如く追加囑託せられたり。
古賀　學久　田中　喜市　　橋本萬右衛門　　海　清
福江　啓之助

地方委員部職員の囑託

佐賀地方委員副長及地方委員轉任に付後任として左の通囑託せられたり。

佐賀地方委員副長　鍋屋　貞三郎
同　地方委員　直井　市藏

奈良地方委員部支部長中異動あり、今回左の通囑託せられたり。

奈良地方委員　支部長
生駒　村井　勝治　　磯城　源　駿　　添上　谷原松
宇智　中島　產太郎　　宇陀　辻　貞三

吉池理事の出張

今回鄰島支會員より蠶絲業講話の爲本會吉池理事の出張を請求し來り左記の日割を以て巡回講話せらるゝ筈なり。

二月七日	石城郡	八日	双葉郡	九日	伊達郡
十日	福島市跡在	十一日	同上	十二日	安達郡
十三日	安積郡	十四日	岩瀬郡	十五日	石川郡
十六日	東白川郡	十七日	西白河郡		

桑樹種子播種試驗の委託

觀近夏秋蠶飼育の發達に伴ひ、實生魯桑の栽培盛んとなりしが種子の需要漸く增加すれども、純粹の種子甚だ乏しく新商此間に於いて當業者を欺き、之が發達を妨害すること尠からざるを以て、本會は清國內地より純粹の魯桑種子を購入し當業者に利益を與ふるの目的にて、清國杭州御買事館より當地方產種子を購入し、先以て種類の良否發芽歩合の如何を檢むべく、左記の講習所及農事試驗場に之が試驗を委託したり。

東西蠶業講習所　宮城　三重（農事講習所）宮崎　島根

蠶桑雜觀

▲佛國蠶業奬勵金

佛國代議院は來年度各省豫算定額に關して夫々討議したるが、農務省所管蠶業奬勵金及び商工務省所管製絲業奬勵金の二項に對して、過般の會議に於て討論に涉らずして、前年度の豫算定額を可決せり、即ち左の如し。

農務省所管蠶業奬勵金
四百二十二萬八千法
商工務省所管製絲業奬勵金
四百二萬五千二百法

議院奬金問題に關する報告は、義に當番の報告せる所なるが、果して來年度豫算定額に議院奬金の項を編入し、之を可決したるは、政府及代議院の意思は正しく之が繼續を是認するにあること、な表明するに足るべし、現行奬勵法制制後に於ける蠶繭產額に關する政府の諮問に對し、關係諸團の商業會議所の過半は現に失する處無き旨答申するところあり、眼より各自の所見に從ひ種々の提案あれども要する に現行奬勵制度を維持するに、永く十箇年以上の實施期を以てし、製絲業の安固を謀ると併に、蚕種改良培育の發達を促さんとの發は殆ど一般の定見なるが如し、然るに奬勵金は生繭一基に對する現行奬勵金六十錢を七十錢に增加し、又た外國輸入に對する現行製絲業奬勵金六十錢を百錢に增加するとして、是れ製絲業の利益に關する所行政大なるを以て、本問題に關して代議院議日の會議に於て、双方の利益を代表する議員等の間に劇烈なる論戰を演ずる所ありんと思惟せらるゝ所なり。（里昂領事報告）

▲世界生絲產額

佛國里昂市の絹絲業センサスの調査に從れば昨三十九年中世界に於ける生絲產額は二千十六萬キロに達せり、即三十八年產額は千八百八十三萬キロにして三千三百年に亞る五ヶ年平均額は千九百六十六萬八千キロなり。

歐洲の產額は三十八年の五百四十九萬五千キロに對し、五百七十五萬七千キロを產し、內佛蘭西は前年の六千三萬二千キロに對し、六千百五十萬キロに增し、「ガルカタ」としては印度輸出額は前年の二十八萬キロに對し、三十八年には二十九萬六千キロにして上海の輸出は四百一萬キロに對し、三百九十八萬キロ、廣東の輸出は二百萬キロに對し、百八十五萬キロなりと、尤も其內上海の分は牧蠶絲及廣東絲なる也合し蓋東の分は英領印度への輸送を含むなり。

▲小島館の祝賀會

茨城縣古河町小島會頭氏の經營に係る小島館製絲場は、明治三十一年の創立して越に十週年の星霜を閲し、此間悲喜慘憺幾多の辛酸艱苦を嘗め、遂に二百七十餘釜の大工場を爲して、幾多の工男工女を從役し其製造の生絲は横濱商館に送付せられて、名聲頗る嘖々たるものあることなるが、客年十一月、陛下常宅の際に武を陪し給ふに當り、長も勅使發遣の一大名譽を蒙られたるを以て氏や感泣措く能はず、翌朝十九日創立十週年の祝賀を兼ねて之が記念の一大宴會を開かれ、當日茨城縣知事を始め來賓一千餘名式場に參列し、本會よりは松平會頭吉澤幸及加藤編輯主任を從へて臨席せられたが、午後一時式に同製絲場に於て盛に擧行され、劇盛に於て可重なる雅趣ありて和氣藹々の間に一日散會したる程午後五時なりし。

秀逸

屠蘇なるさかなにしたり岩手山　岩手　なみ子
疾惜や俳句の友も又嘯　羽前　東泉
新年や萬歳三組鶯二匹　同　汀子
雪の消息は心覺悟て過しけり　伊勢　梅宇
あらたまる年に猛かし我柴　甲斐　文堂軍
霽雪の上や瓦に夕明り　信濃　芳山
（三才發）

讀者文藝

懸賞俳句

花の本花翁宗匠選

茫梅や歴でも淳き墨のいろ　近江　雨枝
年立や又あたらしき富士の顔　鹿兒島　小竹女
夜の明る度に新らし雪の山　豊後　青柳
用意して待つ内に來す疫の船　越前　梅宇
燈られは住とも見えず雪の家　坊玉　潮月
茫梅や蕭り床しき宮の夜　石見　春水
七三五隠の太き岩間の初日哉　福井　愛古
松竹の葉こう奏こう初日かな　丹波　絲梁

落日の影りに氷るや門の雪　信濃　一樂
寒梅や月も香を引く庭の先　紀伊　古城
出ばいりも心配りや雪の朝　京都　日〇
新年や里も豊の朝烟り　山梨　花園
足の跡や睦みあひたる雪の道　丹後　鹽霧
寒梅や先づ初咲は菅公へ　島根　嶺月
雪晴や月の田畑も銀世界　京都　晨鷺夫
新年やまづ振仰ぐ日の笑顔　美濃　登作
神風の松に静けき初日哉　但馬　學堂
寒梅や三日月響ふ風たるみ　京都　素葉
屠蘇祝ふ昨の庭や朝の雪　大山　如泉
新年やよい直に縁の寳れてゆく　甲斐　柳水
これに増す花はあるまじ年の雪　岐阜　砂橋
庭丈の雪を一座の佛哉　埼玉　一枝
盛り砂も松の雫や初日の出　上毛　自樂
寒梅や酒温る掛り。蛤　羽前　白田
屠蘇の抄筑摩の鍋はしらぬふり　相模　廣丈
新年や膳に居れば客ごゝろ　三河　雲臥
月花に親しき友や雪の宿　埼玉　よし風
寒梅や世に誼れらぬ花配り　石狩　桑石
拍手や袖に初日の一雫　三重　春桑
新年や来る人毎に美くしき　丹後　狂鷺
雪ちらりちらり暮けり里の年　近江　吟月
寒梅の薫りに換き庵かな　福島　萩村
屠蘇の香や主人得意の國自慢　越後　半笠
松島も花なり雪の朝ぼらけ　上毛　淺月
寒梅や魁ほこる香の走り　愛知　如生
七五三繩や太き田舎の手始め　羽前　一夫
とその席に達磨も浴て祝ひけり　千葉　梅居
初雪や一重の花の咲にうつる　備後　花鷺

獸ての巧みはふかし夜の雪　越後　江左
温き御代の美くしし初日の出　岩代　丹青
寒梅の香も迎りけり麹室　茨城　信子
新年の話はいつも鶯哉　信濃　東水
山里も新のよい花や今朝の雪　丹後　雪外
人鬼はなくて嬉しや雪の宿　甲斐　亀秋
草庵や鳥に餌を蒔く雪の暮　武蔵　花友
寒梅や春へ曹の土産もの　陸中　獨醒
雪布て豊けき御代の姿哉　紀伊　幾峰
滞ろゝ内其儘や雪の竹　下毛　三春
新年の挨拶早し隣同士　桑折　讃哉
師に従て先へ立はや雪の昼　信濃　花扇
寒梅や日當り誇る椽の先　上毛　松亭
恙ののめや雪に鳥も美くしき　信濃　小澤
七五三繩を障子に畫かく初日哉　甲斐　五玉
新年やたゝ何となく氣のゆるむ　伊勢　梅舍
寒梅や結句雪を友らしき　京都　翠嶺
雪に出て月に戻るや市の駒　周防　蓼舞
積る程光澤増す縁や今朝の雪　山梨　日善
塵の世を塡めて雪の世界哉　常陸　丸露
寒梅やおぼろにほしき月の影　名古屋　冷露
大雪や誇ふ計りの朝日かけ　信濃　頴書
眼休めのなきも亦よし朝の雪　千葉　一羽
合傘や片袖白き六つの花　下毛　慈月
雪の日や紙に裂もつ寫しもの　武蔵　抹桑
寒梅や盛着せてある返し壁　埼玉　季月
鴬飼の張た弓かも雪の竹　信濃　菊翠
片撞は雀に明けて今朝の雪　三重　旭櫻
来る状も皆新年の詞哉　甲斐　桃嵜
酌てしろ心も清し屠蘇の味　岩代　七三櫻

氣のつけば重し雪見の戻り笠　廣島　仙水
雪の日や貯蔵仕度の福物屋　上毛　順信
積雪や松に寛れし鷲一羽　三河　秋宇
屠蘇酌や行儀なこめし諸合　信濃　棠竹
落付て雪はふるなり大みそか　埼玉　東雲
新年や古ひし物もおもしろき　羽前　疊產
只一と夜明けて嬉しき今年哉　周防　樹子
雪三日讀書の人となりにけり　小諸　露光
朝の間に初雪見せて日和哉　近江　白雲
寒梅や夏は清水の汲み所　伊豆　琴子
婦こす人見送るや雪の暮　木曾　遺山
これもよき眺めや雪の結棒　山梨　橋里
雪の日や叢話に爐の暮るゝ　甲斐　北水
寒梅や御池長閑な別世界　駿河　郁堂
割て見よ心も白し雪達磨　信濃　積年
山里も廣き心地や雪の朝　羽前　蟾々
新年やいつも變らぬ蹈振り　磐城　磐山
下り立ちて羽根突く程々屠蘇の酔　出雲　周誠
寒梅やよい蝶鳥の未だ見えす　兵庫　城山
仕済した顔して来たり雪こかし　信濃　窗夢
世のさまを隱すも雪のけしき哉　伊賀　仙史
雪の日や泊る氣で来る友の酔　信濃　紫石
寒梅や盤嫁る鳥の香　埼玉　逸雄
晩には遠いのもよし雪の山　羽前　快風
乗り込た滊車は明石や初日の出　信濃　氷湖
新年や御題の歌を讀み上る　長濱　桑村
寒梅や障子貫く日の馨ひ　下毛　緑天
松の雪先を返す旭哉　丹後　素軒
塵の世を新く清めたし雪の朝　備後　天外
新しき年の始めや雉の聲　三河　其考

道ありやなしや深雪の一つ家　羽前　梅里
寒梅や障子明れば春らしき　上毛　秦山
潮も空も今長閑なり初日の出　羽前　藤軒
見る内に吉野造るや雪の木々　甲斐　柳哉
寒梅やけふは師走の十五日　伊勢　梟川
新年や心は物に馴れ易き　埼玉　雄月
旅の雪枯木の花を栞どころ　秋田　清水
鶏の音を後先にして年新　石見　磯月
寒梅や小椽に削る風の骨　武蔵　喜好
色香なき花も嬉しや松の雪　伊勢　圓良
寒梅の室一ばいの薫り哉　相模　野郎
靄や靄く御代の初日影　羽前　英山
寒梅の咲のも春の迎かな　島後　清井
開る戸に初日拜むや京の町　甲斐　一紀
寒梅や雪見の友に誇る程　岐阜　如水
雪晴の鳥に軒貸す庵哉　木曾　愚泉
豊年の貢美くし六の花　越後　耕月
寒梅や里も長閑に風薫る　丹波　土原
新年や来る人も皆春の顔　三河　山口
ふる雪に任せて宿の早寢哉　千葉　智什
寒梅や野寺の仁王からび居る　近江　江東
雪道や馬士も汗かく世の豊　信濃　松月
寒梅やこれもうき世の散くさ　常陸　菊治
ゆたかなる世の明振りや初日影　尾張　来花
寒梅や寒さ忍ふも笑ひ顔　廣島　靜月
我里も假名所や雪の朝　相模　調月
寒梅や未だ新しき桐火桶　神奈川　珍柳
初雪や明けて嬉しき銀世界　埼玉　根岸
寒梅や世に潔き庵の主　伊勢　眉峰
雪の朝暁も深し桑の畑　豊前　雪花
寒梅や手入の見える袋庭　愛媛　天外

時ならぬ宏扇や屠蘇の宴　上毛　芳賀
寒梅や立ち變る世も知らぬ色　丹後　流水
降る〳〵と雪にさし出す紙燭哉　埼玉　静遊
寒梅や此島影に翠ほしき　武蔵　可春
羨まし年の寒さも知らぬ梅　下毛　愛鷺
寒梅や一枝めてたき心榮　岩代　碧水
嬉しさや初日に向ふ宮参り　愛知　東里
寒梅や雪響造る庵のぬし　甲斐　李月
新年やころつと違ふ人心　羽前　翠雲
寒梅や窓に並へし洗び筆　相模　英松
積む雪に富を占ふ田畑哉　上毛　立花
寒梅や辛苦嘗たる人の庭　常陸　暮雪
新年や社頭の松を歌初　甲斐　松柏
寒梅の鉢や座右の銘のもと　飯山　竹翠
新しき衣裳着替て年一つ　下毛　一耕
よき年た屠蘇に迎る機嫌哉　信濃　一遊
寒梅や夢にも花のさかぬころ　三重　清渕
御慶あくる煩ひもなし庵の雪　美濃　芳月
寒梅の一輪に此薫り哉　兵庫　荻雨
屠蘇の香や一際高き朝ぼらけ　周防　松琴女
道問て宿かる雪の夕かな　羽前　金嶽
寒梅や色香に誇る朝日影　上毛　静山
屠蘇酌て壽延る話し哉　信濃　其蜂
新年や蠶の恵みの初小袖　甲斐　三笑
目にふるゝもの皆清き初日哉　伊賀　緑月
笑はれて袖に包むや屠蘇の酔　武蔵　紫和
朝晴やこれか誠の雪げしき　甲斐　精進
寒梅やあたゝかげなる香の配り　丹波　静雲
顧る臥龍か庵や六の花　上毛　具山
寒梅や稀な日和も空の碍　丹後　遊桑

眼に障物なし雪の朝ぼらけ　信濃　鈴月
屠蘇酌や一人の旅もおもしろき　富山　海樓
花に此静さはなし雪の朝　羽前　華堂
新年やめてたき日数過易き　上毛　寸馬
酒屋出て雪面白曉めけり　千葉　桑園

歳吟

初雪や案山子の身なも思はるゝ　丹波　清月
簾に迎る君か代の春や初日の出　豊後　鶯城
寒梅や啼せて見たき庭の鳥　甲斐　玉塘
夕暮や雪に重みのついて降る　信濃　淺月
惜み〳〵踏潰す京の深雪哉　滋賀　千瓢
春近き杖の手寒き梅見哉　石見　北海
寒梅や鏡の觀るゝ井戸流し　埼玉　素孝
新年や飾りて見たる蠶種　甲斐　嘯風
塔高し奈良は雪見のよいところ　伊勢　定生
眠る迄嗣心なり屠蘇の酔　敦賀　雲麟
季に踏む草鞋は細し雪の道　武蔵　富久
寒梅や打て見たれば香勝　上毛　花住
新年や洗ふたやうな人心　山梨　あさ女
年立や除夜の儘なる月の照り　石狩　知節
文臺の上へ初日や伊勢の海　島根　雨水
松風の里も静や雪の暮　豊橋　井古
收まる手や雪さへ花こゝろ　甲斐　素月
新年や富士にたてたき日の御旗　駿河　其人
雪晴や昨日の里と思はれす　遠江　敬甫
寄る河の藻や浮木に積る雪　阿波　花道家
塵の世に隔たる雪の一夜哉　羽前　MM
寒梅や露ほしげなる香の動き　同　華岳
新年やちらつく雪も御代の花　信濃　里旭
初詣にゆき合せけり雪見舞　長濱　梅島
美くしき物の司や雪の景　紀伊　東漣

人　屠蘇に酔ふはかりも今日の勤役　豐後　柳水

地　寒梅や爐に寄る心亀しき　陸中　蕉平

天　初雪や竹の心に叶ふほと　上毛　松月

人　新年や花影ほしき隅田川　遐加　選者花翁

懸賞　狂句

金坊子選（三才級）

秀逸

縁の糸切れて機織いやになり　茨城　鬼外

やりくりの上手な女昇給し　岡山　工

花嫁に桑摘ますまて銀杏棚はし　丹後　紫軒

嫁御で見れば恋るさうな蠶種なし　武蔵　紫苑

桑摘の縁と補込む蠶絲國　静岡　敬甫

きゝ中にも眼ひるかなし　山形　蟹

結の目筑折り〳〵　茨城　米水

縁の蠶つて買つて線にやり　信濃　出来内

眠り後生上出来と蠶ほめ　米澤　三吳

人　糸買の党を見出して節をつけ　武藏　花友

地　食ひ盛り挨拶背中合はせなり　美濃　芳月

天　飼ふ人は蠶に飼はれ冬を越し　丹波　静雲

選者吟　世に蠶種が壺さはしと褒められ　金坊子

養蠶時馬鹿蹄蠶の用をなし

懸賞　俚謠

高橋鬼川選（三才級）

細い絲でも集めて見れば國の命のもとともなる

可愛がられた蠶も今じや國の蠶とて飼の中

愛やつ蠶を光分あの繭いつて看せたい太絲繭

愛やつ蠶を光分あの繭いつて看せたい太絲繭

蠶飼上手な綜御の繭米は出よる國の花

機せ〳〵出る〳〵女の指で國が榮かん寶綿

花の綿かん桑の中で所ゆうさせる國の綿

洋行する繭の生絲の名譽ひのお方は御名譽

繭行すのは生絲の名譽ひのお方は御名譽

繭は恋恋の繭の蠶君の絲たと國の綿

主は二人で信濃の甲斐は蠶たがひの美濃帶

絲がよい繭き機織なれど國の寶なひきのにす

主は國に変ふ蠶の繭ですよ國の内と外と

蠶飼すりやこそ此の繭衣も着せてやられろ花絲に

蠶飼すりやこそ此の繭衣も着せてやられろ花絲に

赤い蠶で一と節目立つ蠶に機織話やうもも絲

蠶飼は良い御國自慢の業じやもの絲

蠶飼は良い御國自慢の業じやもの絲

米に銭も劣る下と心あたに過さり養蠶時

備後　花童
上毛　美登里
上毛　松本居升
近江　吟月狂生
羽前　藤軒
但馬　桑蔭
武蔵　紫苑
三重　五郎丸
甲斐　松柏
美濃　芳月
尾張　米花
周防　松琴女
三河　秋宇
名古屋　竹童
静岡　敬甫

五客　今年や豊作蠶室建へ　明けや越に雑買ふ　名古屋　竹童

主は戰場に姿や製絲に勤めるの國の蠶　山梨　中蘭舎

死人が其名を錦に遺す人も本　上毛　寸馬

工夫して其名を錦に遺す人も本　山形　蟹

三慈の縁より只だ一と筋に縁ひきしやんせや君の蠶　信州　山水坊

人　主は兵士で命をかける　長野　元月

姿や蠶飼て襷がけ

地　此所も被所も白手拭の　但馬　桑蔭

唄もゆかしや桑畑

天　切れちやいやだとまた繰返し　静岡　敬甫

結ぶ赤繩の糸の口

選者吟　主は遇掛姿や桑摘みに　鬼川

内と外とて赤襷

見とがめしやんすな島田のこはれ

みんな蠶へ心中立て

鍬折る夜の話がつもり

今は主と二ッ繭

姿や白糸奥山育ち

主ゆゑ苦勞を絞り染め　鬼川

御題

見やれうれしやひの住の江の　鬼川

松がほの〳〵明けそむる

御禮參詣の社にうれし　鬼川

絲いろこき女夫松

戊申元旦

猿可憐や烏帽子をつけて　鬼川

人の異似する其苦勞

長女露子を悼む

露の命のさてはかなさよ　鬼川

風の絶間の一とさかり

死んだ我が子によく似た彼の子

御宮詣りかなつかしや

懸賞　一と口噺

秀逸（三才級）

甲「見給へ一番の貧乏で行く人があるから」乙「何所に」甲「あの暦賣さ」　甲斐　一英

○　武蔵　紫苑

甲「君は蠶絲會員になりなん」乙「入會するには金が入るだらう」甲「勿論」　甲斐　一英

○

に一圓五十錢を納むると一生涯會員だよ」乙「それでは初年に止めて二年目からにしやう」

○

甲「貧人とは『ぼん』のことだよ」乙「何故」甲「貧はて（驗河　鄙堂）

法螺吹き甲「東京は日本の大都會だけあつて、火事でも三里位燒けるから凡法螺吹き乙「其位ならば何迚大きいものか甲「何の鼻高山は九里（東京）から燒けた」

甲　雙　谷　城

○　靜　岡　敬　雨

父「コラ！　こんな盤から鮫しないで何か遊戯しろ」「和算は古臭いから洋算（西歐）の研究をして居ます」

讀者文藝懸賞募集

俳　句

▲選者　花の本花翁宗匠

▲課題　椿。白魚。長閑。畑打。春雨。

▲懸賞　天（一人）會銀一ヶ年分◎地（一人）會銀三ヶ月分

▲規則　一題一句つゝ一人に付五句限り。用紙別書に限る。但宜上東京麻布區六本木町三十一番地松林花翁宗匠方。應募者は本會の員者くは會員外と記し住地の國郡町村番地を雅號共明記せらるべし。

（規則外記事の句は選外。殺伐句初學者の癖に應し初學者重便の爲め西鶴翁解釋。國鶯筆選歌佛語移詠國筆七部集及び未來記。白雪集。鶴のもりみち。深川夜雪。羽黒山家鶴。附合集。夏衣集。椿表紙。四鳥對月山集。市の庭集。鶴の鳴。山中歌仙等。謹り古今正鳥俳句。歌仙。百韻の作例集を編輯し五百圓にも利用す之れに出句多句に歌仙。百韻の作例集を編輯し五百圓にも利用す之れに出句多句迄入花巻百圓相場三百十五日限り花

▲選者　萬刷報記者　高橋鬼川先生

▲課題　鱒鱗業に關係あるものならば何にてもよし

▲懸賞　天（一人）會銀一ヶ年分◎地（一人）會銀半ヶ年分◎人（一人）會銀三ヶ月分

俗　謠（都々逸）（原稿ノ切締月三十日限り）

▲選者　萬刷報記者　高橋鬼川先生

▲課題　鱒鱗業に關するものにて工女などに唄はしめても差支なきもの（但し專猥なるものは投書とす）

▲懸賞　天（一人）會銀一ヶ年分◎地（一人）會銀半ヶ年分◎人（一人）會銀三ヶ月分

一と口噺

（原稿ノ切締月三十日限り）

▲選者　萬刷報記者　高橋鬼川先生

▲課題　何にてもよし（但し專猥なるものは謹者とす）

▲懸賞　天（一人）會銀一ヶ年分◎地（一人）會銀半ヶ年分◎人（一人）會銀三ヶ月分

注意

（注意）俳句の懸賞募集は一人に付五句限り（一と口噺は一人に付き一句限り）。但し住地の國郡町村番地姓名雅號共明記し大日本鱒鱗會文藝係宛にて送ること

（注意）俗謠は一人に付五句限り。◎應募者は本會々員若くは會員外と記し住地の國郡町村番地姓名雅號共明記し大日本鱒鱗會文藝係宛にて送ること

鱒海消滴

▲明治四十　年度の貿易總額九億二千六百萬圓其前年に比し多きこと八千六百萬圓なれども又してもも給六千二百萬圓に近く忘しきゆ汝の限りならずや。

▲プライアン氏亦惹鱒魚人排斥を主張すると聞き捨てならぬ問題なり假令大統領選擧戰中の政略也とは云へ人道を無視し逆ふすることの何ぞ善しやの。

▲明治三十　七年より同九年に亙る三ヶ年間に加州其他の在留日本人二千八百十三萬餘圓を故國に送金し來る在米邦人の故國に貢獻する處多大なりかな。

▲政府倉ヶ　今期議會に增稅案を提出せんとす正に是國家的大問題なり知らず輿論如何徒に取利に惚して國民の利害を無視する勿れ至囑至望。

▲晩香坡在　住日本人中無賃兵役にある者數百人難民の生命を奪す是日本に開戰の意思あるものと想像すべし親官の發電自人の邦福も捷に至て寥寥禮。

▲北陸地方　未曾有の大降雪雪毛鱒を飛ん又は寒風の利害を無視する如れ至囑至望。

▲政府倉ヶ　今期議會に增稅案を提出せんとす正に是國家的大問題なり知らず輿論如何徒に取利に惚して國民の利害を無視する勿れ至囑至望。

▲晩香坡在　住日本人中無賃兵役にある者數百人難民の生命を奪す是日本に開戰の意思あるものと想像すべし親官の發電自人の邦福も捷に至て寥寥禮。

▲北陸地方　未曾有の大降雪雪毛鱒を飛ん又は寒風の利害を無視する如れ至囑至望。

▲明治三十　七年より同九年に亙る三ヶ年間に加州其他の在留日本人二千八百十三萬餘圓を故國に送金し來る在米邦人の故國に貢獻する處多大なりかな。

▲政府倉ヶ　今期議會に增稅案を提出せんとす正に是國家的大問題なり知らず輿論如何徒に取利に惚して國民の利害を無視する勿れ至囑至望。

▲晩香坡在　住日本人中無賃兵役にある者數百人難民の生命を奪す是日本に開戰の意思あるものと想像すべし親官の發電自人の邦福も捷に至て寥寥禮。

▲北陸地方　未曾有の大降雪雪毛鱒を飛ん又は寒風の利害を無視する如れ至囑至望。

▲神奈川縣　鱒鱗業場設置以來工式を設けたるの同業到を惜みて近畿の者者六十餘人來競し藝を學ぶ者多し文明の今日此變行智ならざるべきかな。

▲木邦鱒種　業界の名士信州鹿本等有爲同氏時事に關して會員會計を組織し以て鱒耳鱒種の供給に專ずと聞く人智論の益益ならんか前途や如。

新刊紹介

近畿鱒藥資料　全　永井環著

全編を養鱒の部、魚樹の部、法規の部、統計の部、雜の部の五部に別ち養鱒家に必要の事項は大抵網羅して鱒魚精華鱒藥業覺などい同じやうに編纂したものである、ポケットに入れ小形の美本にして携帯用に至極便利に出來て居る（定價八十錢發行所東京市日本橋區蛤屋町十四番地丸山舍）

交　詢　餘　錄

●書籍要望　信濃鱒業出革資料壹部讓受たし御持合の方は代價御通知を附ふ。福島縣伊達郡伊達崎村　石幡吉四郎

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI EN DIVERSES INDUSTRIES.

(Décembre 1907.)

	Report.	Brought over.	Arrivé.	Arrived.	Vendu.	Sold.	Exporté.	Exported.	Renvoyé.	Sent back	Ensemble.	Brought forward.
	Piccul.	*Piccul.*	*Piccul.*	*Piccul.*	*Piccul.*	*Piccul.*	*Piccul.*	*Piccul.*	*Piccul.*	*Piccul.*	*Piccul.*	*Piccul.*
Filature.	Filature.	17.863	8.665	1.171	—	—	1.503	18.653
Zagori.	Reroul.	4.949	1.099	540	—	—	78	5.429
Kakeiri.	Orihayashi.	1.231	77	87	—	—	41	1.181
Autres.	Other.	66	8	—	—	—	—	74
Total.		24.109	9.849	1.818	5.791	1.672	25.317
1906.		9.081	10.702	10.249	10.362	1.273	8.316

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI EN DIVERSES INDUSTRIES.

(December 1907.)

會員に稟告

本會會員住所變更の時は必ず新舊住所御通知相成度候

明治四十一年一月

大日本蠶絲會

轉居

牛込區矢來町三番地山里

第二十三號

吉池慶正

編輯兼發行人　東京市神田區美土代町三丁目二番地　小池市松

印刷人　東京市神田區美土代町二丁目一番地　島連太郎

印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍活版所

東京市神田區美土代町三丁目二番地

發行所　大日本蠶絲會（電話本局一四七三番）

明治四十一年一月二十日印刷發行

◉本報定價　一冊金拾五錢　一ヶ年分前金壹圓七拾錢

會員ハ右料金ノ二割引トス

特等ハ四分ノ一頁未滿ハ謝絕ス

料金ハ前金ニアラサレハ掲載セス

一頁ハ一行二十七字詰七十二行トス

大日本蠶絲會報廣告料

	特等			並等		
	一頁	半頁	四分ノ一頁	一頁	半頁	四分ノ一頁
一回乃至二回ニ付	十五圓	八圓五十錢	五圓	十二圓	七圓	四圓
三回乃至六回ニ付	十二圓	七圓	四圓	十圓	六圓	三圓五十錢
七回以上一回ニ付	十圓	六圓	三圓五十錢	八圓	五圓	三圓

四分ノ一頁以下ハ一行ニ付金參十錢ヲ申受ク

MARCHÉ DES SOIES.

MARCHÉ DE YOKOHAMA.

Voici la situation de notre marché au mois de Décembre dernier.

Au commencement de ce mois, les prix ont été sur le point de baisser au dessous de yen 900. Mais un bruit ayant couru, le 5 courant, que la section d'exportation de la compagnie Hara a l'intention d'acheter environ vingt mille *kin* de soie, les marchands tant intérieurs qu'extérieurs, qui avaient regardé avec inquiétude la marche des affaires, ont commencé brusquement leurs achats. Aussi, le marché, qui était si longtemps plongé dans une profonde accalmie, présenta-t-il à peine une certaine activité et les prix ont accusé graduellement la hausse: Yen 930, le 7 courant, yen 940, le 10, yen 980 le 11. Ils ont même presenté une tendance de progresser jusqu' à 1,000 yen, mais les hésitations des vendeurs et des acheteurs ont de nouveau occasionné l'accalmie sur notre marché et les transactions sont devenues très rares. Cependant, dès le Noël, les affaires, ont été petit à petit enregistrées pour la livraison du premier marché de la nouvelle année. Le titre fin le titre ferme ainsi que le zaguri ont été l'objet de la transaction du 30 courant, et on a enregistré, le 31, plus de 2,500 balles. Mais les cotations restent stationnaires: Yen 940 pour Extra No 1 et yen 965 pour zaguri deux filles. Nous avons cloturé l'année avec un immense stock de 45,000 balles.

Les tableaux suivants indiquent d'ailleurs le mouvement de la soie durant la même période.

RAWSILK MARKET.

THE YOKOHAMA RAW-SILK MARKET.

The condition of the Yokohama Rawsilk Market during the month of December is summarized as follows.

In the beginning of the month, the quotations were on the point of falling below Y. 900 Y.900. But on the 5th, there got abroad a rumour to the effect that the Export Department of Hara Co. had the intention to buy about 20,000 *kin* of silk, and this had accidently the effect to ameriolate the stagnant condition of the market, and the silk merchants, native as well as foreign, who had hitherto been keeping an attitude of reserve, only observing the condition of the market, now showed the signs of activity. In consequence, the market, which had long been in dull state, now began to gradually recover its briskness. And the prices began to go upwards, so that on the 7th, it was Y.930, which was the lowest, on the 10th, Y. 940, and on the 11th, Y.980, which indicated even to rise to the stage of Y. 1,000. However, after this hopeful tendency, the market again collapsed into inactivity brought about by the reserve in transaction maintained both by seller and buyer, and so no big sale was made. Coming to the Christmas time, however, a deal of transaction commenced to be made. On the 30th, a good deal of sale was made in fine size, coarse size, and *zaguri* silks. Especially, the last day of the month was a good day, indeed as much as 2,500 bales of silk changing the hands. But the quotations were still stationary, extra no. 1 was sold at Y. 940, and *zaguri-two girls* at Y. 965 respectively. All in all, the total amount of silk lying on the market at the close of the year reached so big figures as 45,000 bales.

The following table shows the movement of the silk during the same period.

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI PAR JOURS.

DIAGRAM SHOWING DAILY MOVEMENT OF RAW SILK.

	Soie. Silk.				Maximum du prix. Highest prices.	
ours. Days.	Arrivée. Arrived.	Vendue. Sold.	Renvoyée Sent back.	Exportée. Exported.	Noms des filateurs. Names of filaturs.	Prix. Prices.
	Piculs.	*Piculs.*	*Piculs.*	*Piculs.*		*Yen*
1	—	—	—	—	——	——
2	826	167	160	—	——	——
3	361	154	34	100	——	——
4	306	52	84	754	Tōkōsha.	1.000
5	238	147	23	—	——	——
6	376	226	22	—	——	——
7	265	137	30	—	——	——
8	—	—	—	—	——	——
9	582	359	65	—	Kokuhōsha.	1.070
10	483	401	53	408	Kōnansha.	1.070
11	219	225	114	408	Watanabeseishijō.	930
12	388	307	62	—	Kokuhōsha.	1.090
13	343	388	63	—	Tōsuisha	1.080
14	220	382	66	527	Iwabuchiseishijō.	1.090
15	—	—	—	—	——	——
16	900	288	28	—	Hiraiwaseishijō.	1.060
17	251	231	35	201	Yajimagumi.	1.070
18	303	270	56	1.090	Tōgōkwan.	1.100
19	330	269	49	—	Nakainasha.	1.030
20	294	237	57	—	Tōsuisha.	1.085
21	422	209	19	319	Kōseisha.	1.080
22	—	—	—	—	——	——
23	527	359	52	—	Nisshinkwan.	1.000
24	265	290	—	379	Asahisha.	1.080
25	353	153	43	—	Makiseishijō.	1.000
26	253	269	87	1.137	Shinyōsha.	1.115
27	425	81	107	—	——	——
28	397	167	139	394	——	——
29	—	—	—	—	——	——
30	560	—	172	—	——	——
31	—	—	—	74	——	——
Total	9.887	5.818	1.620	5.791	——	——

1 yen want environ fr. 2.50. 1 Picul = 60 kilg. environ.

année et la nouvelle Condition commença à fonctionner le lendemain.

Pendant les premières années les opérations furent peu nombreuses mais, au fur et à mesure que les intéressés le rendirent compte de l'utilité et même de la nécessité d'une condition pour le commerce des soies le nombre des opérations augmenta graduellement surtout après la conclusion en 1899 de l'entente des marchands japonais et des maisons étrangères pour la modification des usages du commerce des soies.

En 1901 on fut obligé d'agrandir l'établissement, on augmenta le nombre des appareils, les bureaux reçurent une nouvelle organisation. Ces modifications en facilitant le travail donnèrent un nouvel essor á la Condition.

Nous donnons ci-dessous le relevé du nombre d'opération de conditionnement et d'essais effectués à la Condition chaque année depuis sa fondation. On pourra ainsi se rendre compte du mouvement croissant des opérations:

Année	nombre d'épreuves de conditionnement	Nombre d'essais
1896	221	978
1897	178	2.431
1898	232	4.636
1899	737	8.469
1900	4.047	7.079
1901	18.236	15.003
1902	38.751	18.242
1903	31.157	24.506
1904	41.998	28.544
1905	32.527	27.909
1906	45.196	35.503
1907	37.807	36.824

(Les chiffres du conditionnement en 1907 sont inférieurs à ceux de l'année précédente par suite de la mauvaise situation du marché des soies conséquence de la crise financière américaine dont les effets se sont faits sentir depuis le mois d'octobre dernier.)

Comme on le sait la consommation de nos soies a augmenté dans de grandes proportions depuis quelques années en Europe et en Amérique. D'après un rapport récent de la Chambre syndicale de l'Union des marchands de soies de Lyon l'exportation des soies du Japon a atteint près de 30 % de la production mondiale.

Le tableau suivant fait ressortir les progrès de l'exportation pendant les 12 dernières années c. à. d. depuis la fondation de la Condition des soies de Yokohama :

Année	Quantité Balles	Valeur Yen
1896	39.189	28.830.601
1897	69.198	55.630.460
1898	48.373	42.047.411
1899	59.469	62.627.721
1900	46.309	44.657.028
1901	86.977	74.667.330
1902	80.781	76.859.477
1903	73.155	74.428.906
1904	96.585	88.740.701
1905	72.419	71.843.755
1906	103.836	110.442.800
1907	92.434	116.105.990

En 1905 le chiffre des transactions s'étant élevé beaucoup et subitement, l'installation de la Condition fut prouvée insuffisante et les retards occasionnés par l'encombrement furent la soursce d'assez sérieux inconvénients. Les Chambres syndicales des marchands de soies japonais et étrangers sollicitèrent alors du gouvernement les agrandissements qui viennent d'être effectués.

Le gouvernement acquiesa à cette demande, les dépenses nécessaires figurèrent au budjet de 1907 et l'approbation des deux Chambres ayant été obtenu, les travaux pour la nouvelle construction commencèrent dès le mois d'avril.

Cette construction aujourd'hui complètement terminée a permis l'agrandissement de la salle de réception pour le conditionnement, l'agrandissement de la salle d'essais dont le nombre d'appareils et de machines a pu être doublé. Le second étage de la nouvelle construction comprend un musée pour l'exposition des soies et une salle de réunion. Le plan général du nouvel édifice figure dans le bulletin de l'association séricicole du Japon.

En résumé, la Condition créée dans un but moralisateur assure aux vendeurs et aux acheteurs par les différentes opérations du pesage, conditionnement, décreusage et essais la loyauté des transactions; elle signale d'autre part aux filateurs les défauts de leurs produits et les stimule à améliorer leurs procédés de fabrication. Elle peut donc être considérée comme un organe essentiel et indispensable pour l'amélioration des soies japonaises. J'espère que les intéressés japonais et étrangers utiliseront les nouvelles facilités que la Condition vient de mettre à leur disposition.

L'enseignement donné ayant toujours eu un caractère exclusivement pratique, les directeurs jugèrent en 1901 d'y adjoindre l'enseignement théorique et établirent avec l'autorisation ministérielle, une grande Ecole Sericicole. Le Gouvernement s'engageait à lui accorder une subvention annuelle de 800 yens, pendant 5 ans.

D'après le rapport fait à la fin du 1er semestre par la société, on compte 37.772 sociétaires et 767 professeurs envoyés par elle dans toute les régions sericicoles. On pourra se rendre compte des progrés de cette société par les chiffres suivants :

Années	Nombre de sociétaires	Nombre de professeurs
1873	29	2
1877	75	7
1882	113	11
1887	1.693	48
1892	6.089	248
1897	15.464	385
1902	22.887	515
1907	37.772	767

(à suivre)

Historique de la fondation de la Condition Impériale des Soies de Yokohama—Son fonctionnement jusqu' à ce jour—Amélioration et agrandissements récents de cet Etablissement.

Par Mr. A. Shito.

C'est en 1859 que commença sur le marché de Yokohama le commerce des soies. Les relations des acheteurs avec les marchands de l'intérieur ayant été jusque là presque nulles une certaine méfiance présida aux premières transactions qui furent insignifiantes. Si on ajoute que les procédés de filage au lieu de s'améliorer devenaient de jour en jour plus mauvais. On concevra facilement les sérieuses entraves qui gênaient l'essor de ce commerce d'exportation qui tendait à prendre une importance considérable.

Vers 1868, le gouvernement jugeant qu'il était indispensable de remédier à cet état de choses ordonna que toutes les soies seraient soumises à son inspection et publia un décret réglementant d'une façon rigoureuse les procédés de filage des soies destinées soit à l'exportation soit à la consommation indigène. Il alla même jusque à interdire l'exportation et la vente des soies filees contrairement à ses prescriptions.

Il faut reconnaître que les filateurs apportèrent tous leurs soins à l'amélioration de leurs produits mais ils étaient si gênés par les clauses trop étroites du règlement que le développement des affaires s'en ressentait. En 1877, sur la demande énérgique des intéressés le décret gouvernemental fut abrogé.

Nous avons tous conservé le souvenir des difficultés qui s'élévèrent en 1881 entre les maisons d'exportation étrangères et les marchands japonais, et on se rendit compte que le seul moyen de les faire cesser était de faire préceder les transactions d'un examen sérieux des soies.

Le gouvernement mit à l'étude le projet de l'installation d'une Condition des soies semblable à celles fonctionnant en Europe et en Amérique. Ce projet fut soumis au 1 er Congrès des Sericiculteurs, Filateurs et marchands de soies, réunis en 1883 au ministère de l'Agriculture et du Commerce. Mais ce projet longtemps discuté n'obtint pas le succès attendu.

En 1894, un nouveau projet fut déposé devant la Chambre des Députés et plus heureux que le premier fut adopté par cette Chambre et immédiatement après par la Chambre des Pairs.

(La loi sur la Condition des soies, l'ordonnance ministérielle et les dispositions relatives aux opérations de cet Etablissement ont été traduites en français et distribuées aux intéressés étrangers)

Le 17 Juin 1895, le Ministre de l'Agriculture et du Commerce fit commencer la construction du nouvel Etablissement en même temps qu'il chargeait le Consul du Japon à Lyon de commender des appareils dessiccateurs système Talabot-Persoz-Rogeat adoptés par toutes les Conditions européennes et américaines ainsi que tous les autres appareils nécessaires pour les diverses opérations de décreusage dt d'Essais.

L'ordonnance ministérielle règlementant le fonctionnement du nouvel établissement s'inspira des réglements des Conditions d'Europe et d'Amérique et plus particulièrement de ceux de la Condition de Lyon.

La construction de l'édifice, l'installation des appareils et l'aménagement intérieur furent terminés en 1896, l'inauguration eut lieu le 5 août de la même

明治二十七年八月二十五日第三種郵便物認可

Sociéte Séricicole "Takayamasha" de Fujioka (Joshiu).

Cette société a son siège à Fujioka dans la province de Joshiu, la plus importante région soyeuse du Japon. Elle a été établie par C. Takayama dans le but d'améliorer et de propager les procédés d'éducation des vers-à-soie.

Voici l'origine de cette société :

—Le grand sériciculteur C. Takayama, né en 1830, et résidant dans le village de Takayamamura Midorinogori (Joshiu), après avoir poursuivi pendant plusieurs années l'amelioration du mode très primitif d'élevage usité par les sériciculteurs, mode dont il avait reconnu le peu d'efficacité, adopta en 1868 le procédé, dit Seion-iku, qui consiste à élever les vers à une température modérée.

—C. Takayama, s'étant rendu compte que le climat humide du Japon nuisait parfois à l'éducation des vers, ne cessa de recommander à ses compatriotes de toujours servir aux vers un gite exempt d'humidité et de veiller scrupuleusement à l'enlèvement régulier des litières, leur fermentation pouvant causer de très grands préjudices aux chambrées.

—Ces procédés ayant donné de très bons résultats furent adoptés peu à peu par la majorité des sériciculteurs, dont plusieurs mêmes, à partir de l'année 1870 suivirent le cours pratique que C. Takayama avait organisé.

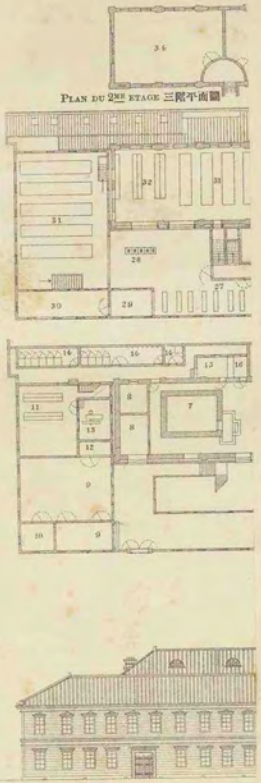
L'abondance des élèves le décida en 1873 à établir une station séricicole qu'il nomma Takayamagumi et qui devait servir uniquement à enseigner les procédés d'elévage de son fondateur.

—L'organisation de cette station fut modifiée en 1884 et nommée Société de Takayamasha ; Mr. C. Takayama fut élu Président et Mr. K. Machida Vice-president.

Mr. C. Takayama, cet homme éminent qui avait rendu de si grands services aux regions séricicoles du Japon, mourut le 10 décembre 1886. Il nomma, par testament, Mr. K. Machida président, Mrs. M. Takahashi et B. Takayama Vice-présidents.

En 1887, le siège de cette Société fut transféré à Fujioka, où un grand établissement y fut construit.

Le monument commémoratif élevé à la mémoire du regretté C. Takayama fut inauguré en 1891. La même année, à cette occasion, eut lieu le premier concours public.



PLAN DU 2ME ETAGE 三階平面圖

CONDITION IMPÉRIALE DES SOIES DE YOKOHAMA

(生絲檢査所)

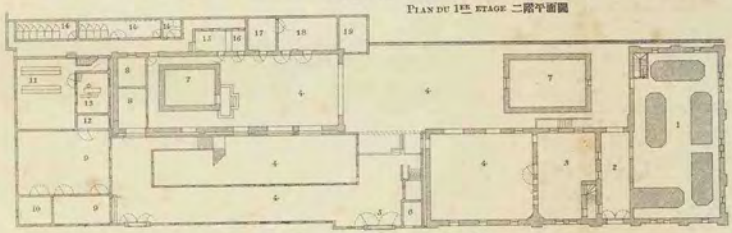
ECHELLE DE 1/250

(一之分十百五尺二縮)

1 Calorifères	煖爐	13 Moteur	原動機	25 Salle du directeur	所長室
2 Parterre	土間	14 Cabinets	便所	26 Parloir	應接室
3 Salle de pesage	原量室	15 Chambre des gardes de nuit	宿直室	27 Appareils pour examiner de la soiffeée	顯微器
4 Salle de réception	正量荷受場	16 Chambre des gardes	守衛室	28 Dynamomètre-dynamomètres	強力
5 Entrée	入口	17 Salle de décreusage	練減室	29 Salle de pesage des Bottillons	品位精秤室
6 Guichet	受附	18 Chambre des ouvrieres	工女室	30 Bureau des essais	品位事務室
7 Godown	倉庫	19 Chambre des hommes de peine	定雇夫詰所	31 Banques de dévidage	再繰器
8 Chambre des domesciques	小使室	20 Dessiccateurs	乾燥器	32 Eprouvettes	檢査器
9 Salle de réception (essais)	品位荷受場	21 Bureau du conditionnement	正量事務室	33 Salle d'assemblée	會議室
10 Salle d'inspection	査定室	22 Bureau des études	調査室	34 Musée	陳列室
11 Redévidoirs	揚返器	23 Salle à manger	食堂		
12 Salle de séchage des soies redévidées	揚枠乾燥室	24 Bureau d'administration	庶務室		

PLAN DU 2ME ETAGE 三階平面圖

PLAN DU 1ER ETAGE 二階平面圖



PLAN DU REZ-DE-CHAUSSEE 一階平面圖

ELEVATION 正面圖